

人文科学・社会科学系における 大学院教育等について

前回（第104回）資料へのご感想・ご意見（概要）

（令和4年2月16日 第104回大学院部会の資料に対する委員からの意見・コメントを基に作成）

■ キャリアパスについてのご意見

- アカデミア外の就職者数が多い＝キャリアパスが担保されているとは限らない。修了直後だけでなく、数年後の変遷まで追えると良い。
- 人文科学系のキャリアパスが大学と密着な原因は学生側にあるのか指導教員側にあるのか、制度的なものが影響しているのか。

【学生側の論点】

- ・ 人文科学・社会科学系の大学院に進んだ学生はどれほどがアカデミア志向か（肌感覚的にはアカデミア志向が強いとの意見）。
- ・ 人文科学系では本人の関心に合った業務や職種が少なく、民間等に就職してもワークライフバランスが満たされなければ戻ってくる。
- ・ 今の人文科学・社会科学系の議論は、十数年前の素粒子・物理等の分野のそれと同じ道を辿っているのではないか。

【教員側・大学側の論点】

- ・ アカデミアにおける雇用の実情を踏まえ、人文科学・社会科学系の方々が何を考え、どのように変わってほしいのかが見えてこない。大学院の教育課程がどのような現代的な在り方を提示できるかを考える必要がある。
- ・ いたずらに時間をかけても、学生本人のキャリアパスにとって必ずしもプラスにはなっていない。課程がある以上、標準修業年限を逸脱しない範囲で人材を輩出する責任がある。研究に時間がかかるとは言え、やりようはあるのではないか。
- ・ 学生の問題よりも、指導教員の意識の問題が大きいのではないか。
- ・ 教員の研究と教育が補完的である自然科学系に比べて、人文科学・社会科学系では、教員の研究と教育が代替的であり、大学院生を迎え入れ、教育するインセンティブが生じづらいのではないか（あったとしても、それは自分の後継者育成のために過ぎない？）。
- ・ 学生の定員充足を優先することは不幸を生むことに繋がりがねない。入学者数を絞ってでも、標準修業年限に合わせて修了してもらい、優秀な人たちには然るべく安定したアカデミアの道を用意するといった循環を回すことが重要ではないか（ただし教員もが減少すると成立しないため、学生が減って生じた余力を、キャリアパスの開拓や新たな大学院教育、学位プログラム等に繋げるべき）。

【社会側の論点】

- ・ 多くの経営者や機構関係者が人文科学・社会科学の考え方や人材の必要性を説くものの、具体的に期待する役割までを示すことができていない。一方で、大学側からも、そうした形での具体的な提示がなされていない。
- ・ 産業イノベーションから社会イノベーションに転換する中で、必要となる・出てくる人材像や実際のニーズは（特にパブリックセクター）。

前回（第104回）資料へのご感想・ご意見（概要）

（令和4年2月16日 第104回大学院部会の資料に対する委員からの意見・コメントを基に作成）

■ 教育研究環境（研究時間等）について

- 人文科学・社会科学系の大学院生の1日あたりの研究時間が自然科学系に比して少ないのは、どのような実態なのか。
- 研究時間のデータについては、社会人学生の割合が影響しているのではないか。
- 自然科学系と人文科学・社会科学系とで何を研究とみなすかに違いがある可能性がある。
- スローサイエンスと言われているのは、研究成果をまとめるのに時間がかかるという意味のほかにも、効果が出るのに時間がかかるという意味もある。また、重要な研究成果はいつまでも引用されていくという意味もある。
- 人文科学・社会科学における時間軸は、最新・最先端の部分を追いかけている自然科学系とは違う形になる部分もある。



【今回】

前回いただいたコメントに対する補足データ等をお示ししつつ、今回は人文科学・社会科学系の大学院教育の実態やそのあり方についてご議論いただきたい。

【次回以降】

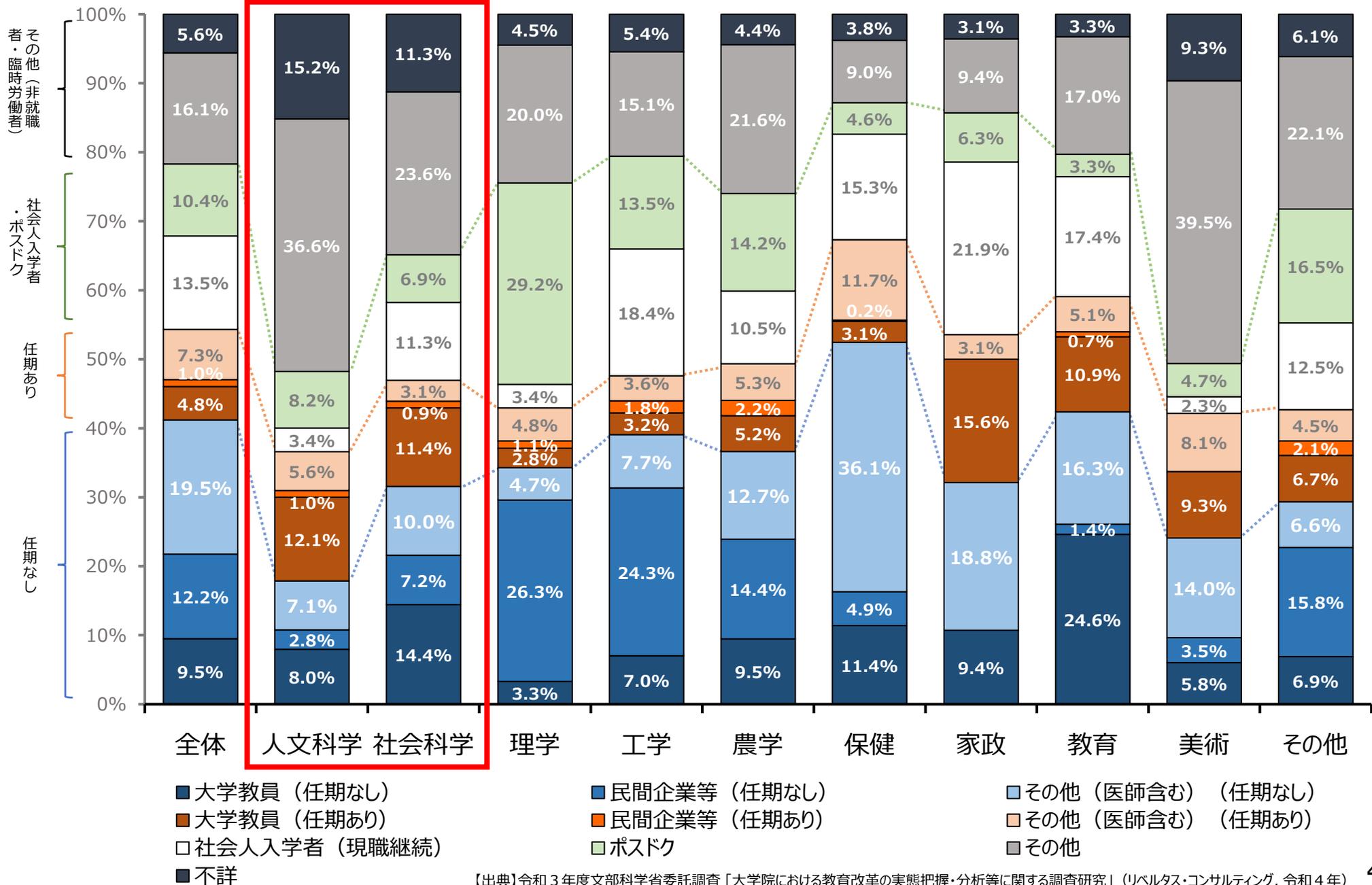
議論の内容を整理した上で、あるべき人文科学・社会科学系の大学院教育について、大学院部会として中間とりまとめを策定することとしてはどうか。

（スケジュール案）

- 4月11日 : 人文科学・社会科学系の大学院教育に関する議論
- 5月 : 人文科学・社会科学系の大学院教育及び中間とりまとめ（案）に関する議論
- 6月 : 中間とりまとめ策定

キャリアパスについて

博士後期課程修了後の進路

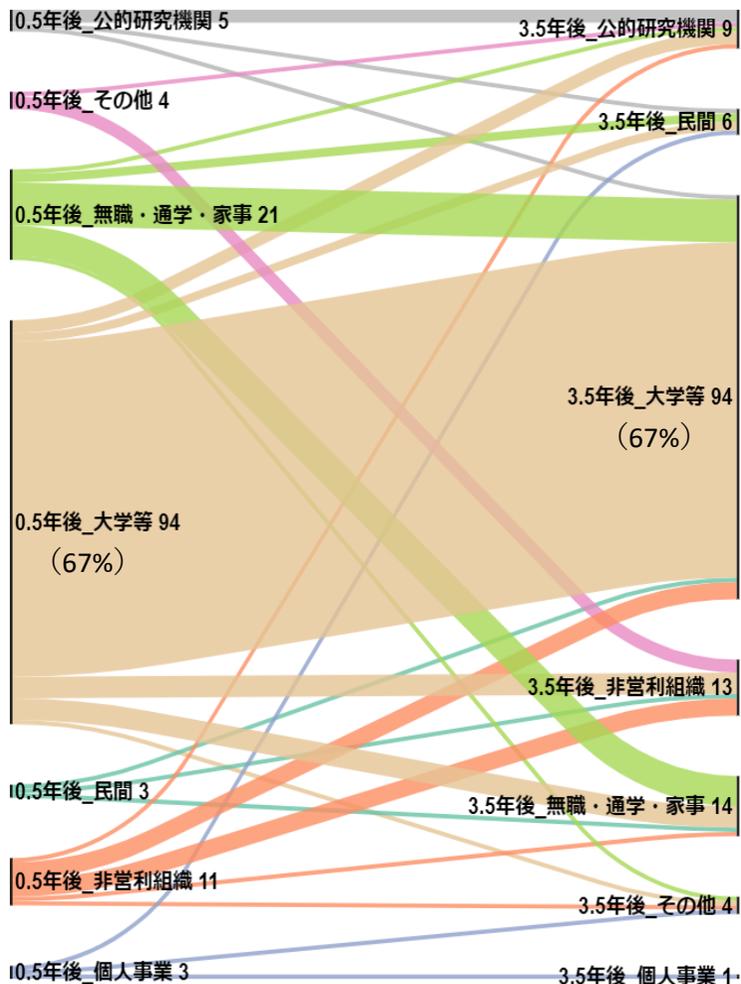


【出典】令和3年度文部科学省委託調査「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（リベルタス・コンサルティング、令和4年）

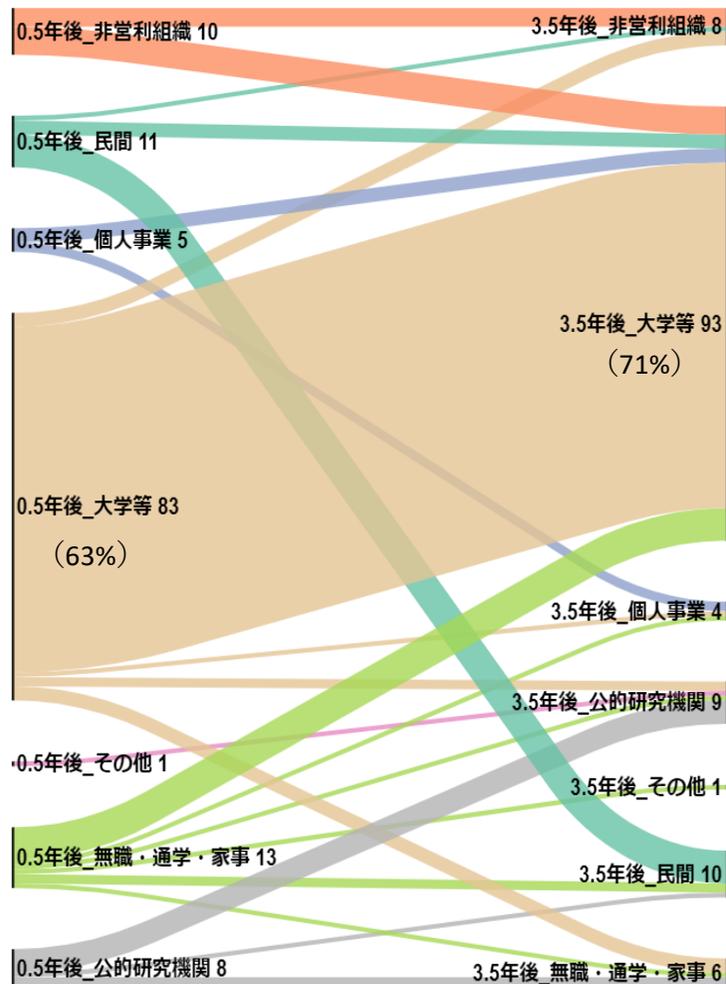
博士後期課程修了後のセクター間移動（0.5年後から3.5年後, 2015年コホート）

- 人文科学系及び社会科学系では修了0.5年後もしくは3.5年後、大学等において雇用されている割合が全分野に比して高い。
- 全分野では大学等への流入率が流出率を上回るが、人文科学系においては流出入が均衡している。
- 人文科学系では「無職・通学・家事」の状態が3年後も継続している割合が社会科学系よりも高い。

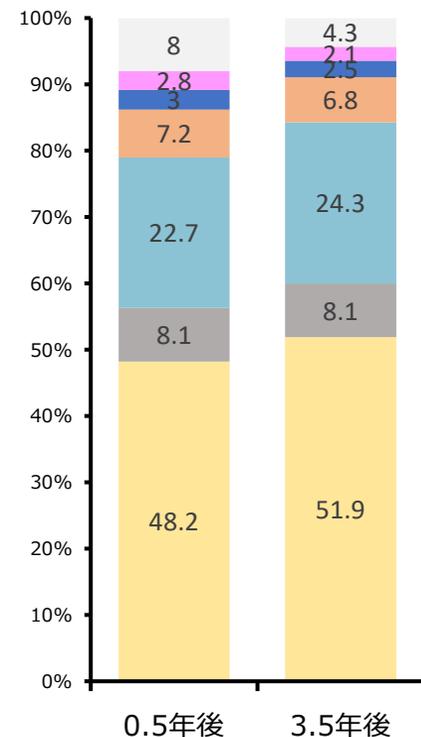
■ 人文科学（実数値）



■ 社会科学（実数値）



（参考）全分野の雇用先（割合）

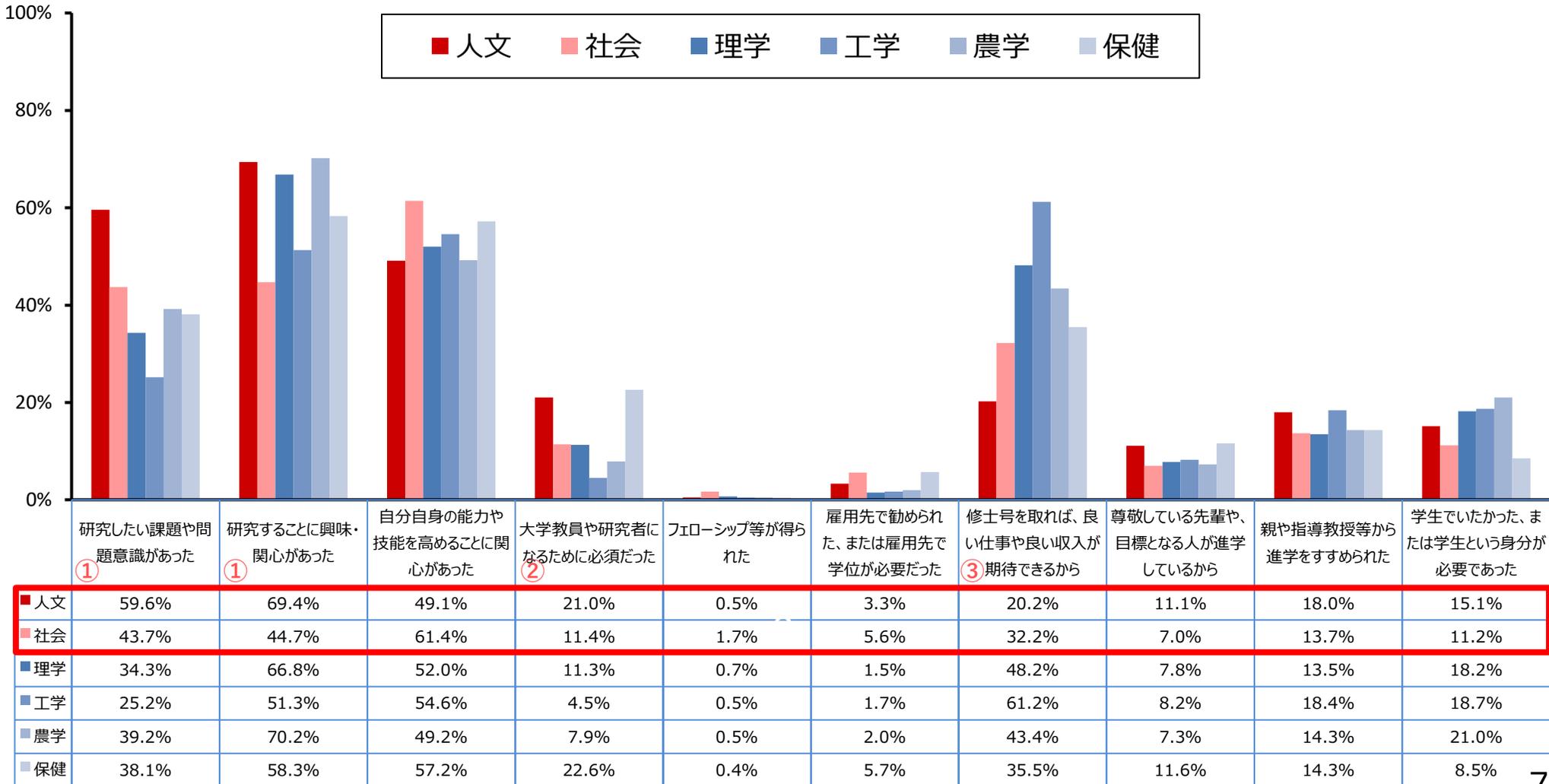


- 無回答
- その他
- 個人事業主
- 非営利団体（学校・行政等含む）
- 民間企業
- 公的研究機関
- 大学等

大学院進学者の意識 (アカデミア志向等) について

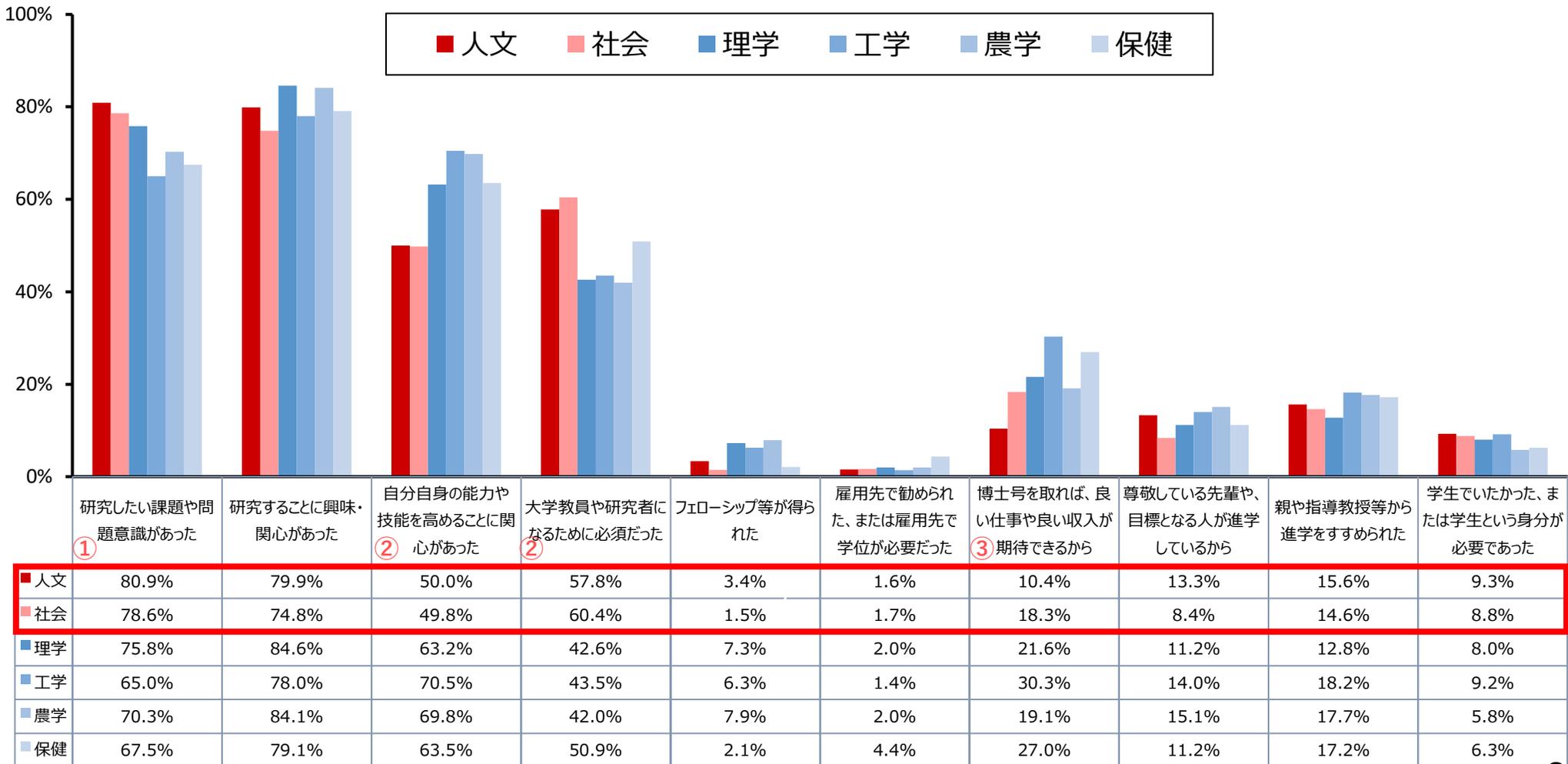
修士課程への進学理由

- ① 人文科学系は社会科学系よりも研究そのものに対する関心が高く、理工農系よりも特定の課題や問題意識に照らして進学行動を取る割合が高い(専門分野へのこだわりが強い?)。
- ② 人文科学系では大学教員を志向して進学する割合が高い(医者のキャリアパスが想定される保健を除く)。
- ③ 人文科学・社会科学系ともに良い仕事や良い収入のインセンティブは高くないが、人文科学系では特に低い。



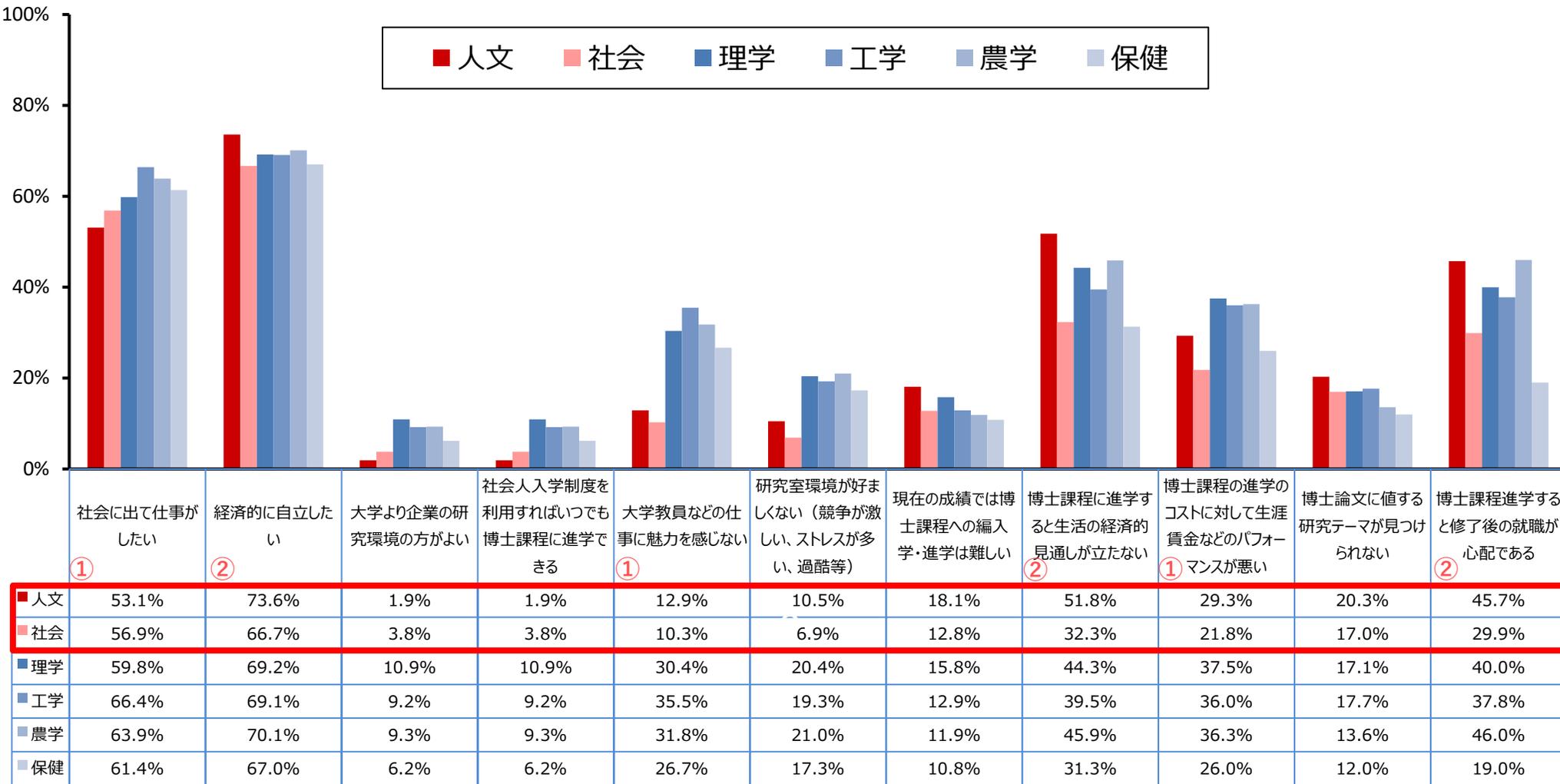
博士課程への進学理由

- ① 修士課程進学とは異なり、博士課程進学では人文科学系に加えて社会科学系も特定の課題や問題意識に照らして進学行動を取る割合が高い。
- ② 一方、人文科学・社会科学系の博士進学理由では、自らの能力や技能を高めること(自己啓発)への関心が弱く、大学教員・研究者を強く意識したものとなっている。
- ③ 修士と同様、人文科学・社会科学系ともに良い仕事や収入のインセンティブは高くないが、人文科学系では特に低い。



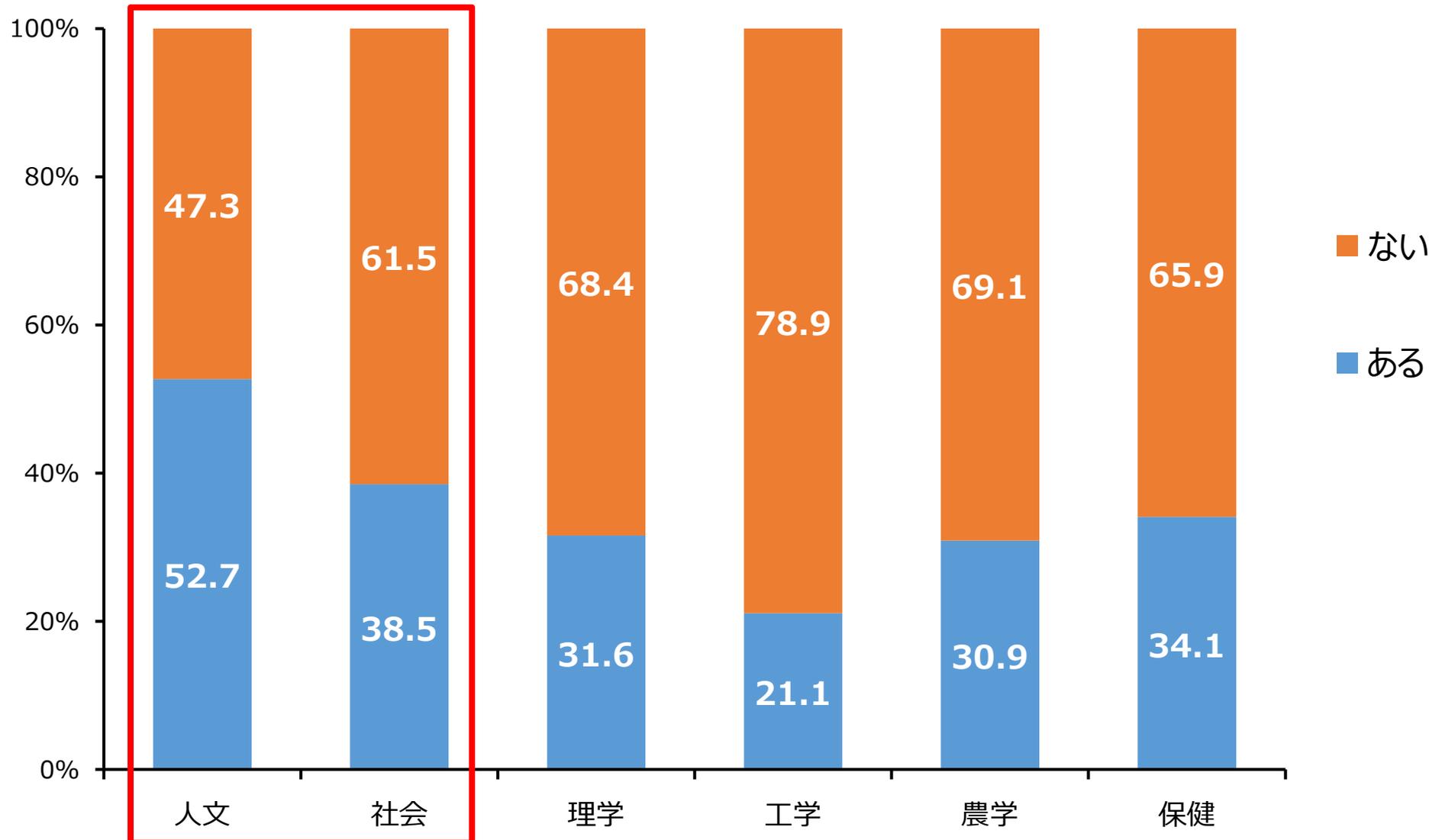
博士課程進学ではなく就職を選択した理由

- ① 人文科学・社会科学系では「社会に出て仕事がしたい」や「生涯賃金のパフォーマンスが悪い」、「大学教員などの仕事に魅力を感じない」を選んだ者が少ない(=就職者であっても、修士課程修了者のアカデミア志向が強い)。
- ② 人文科学系は社会科学系よりも「経済的な自立」や「生活の経済的見通しが立たない」を選ぶ者が多く、「修了後の就職が心配である」を選ぶ者も多い。



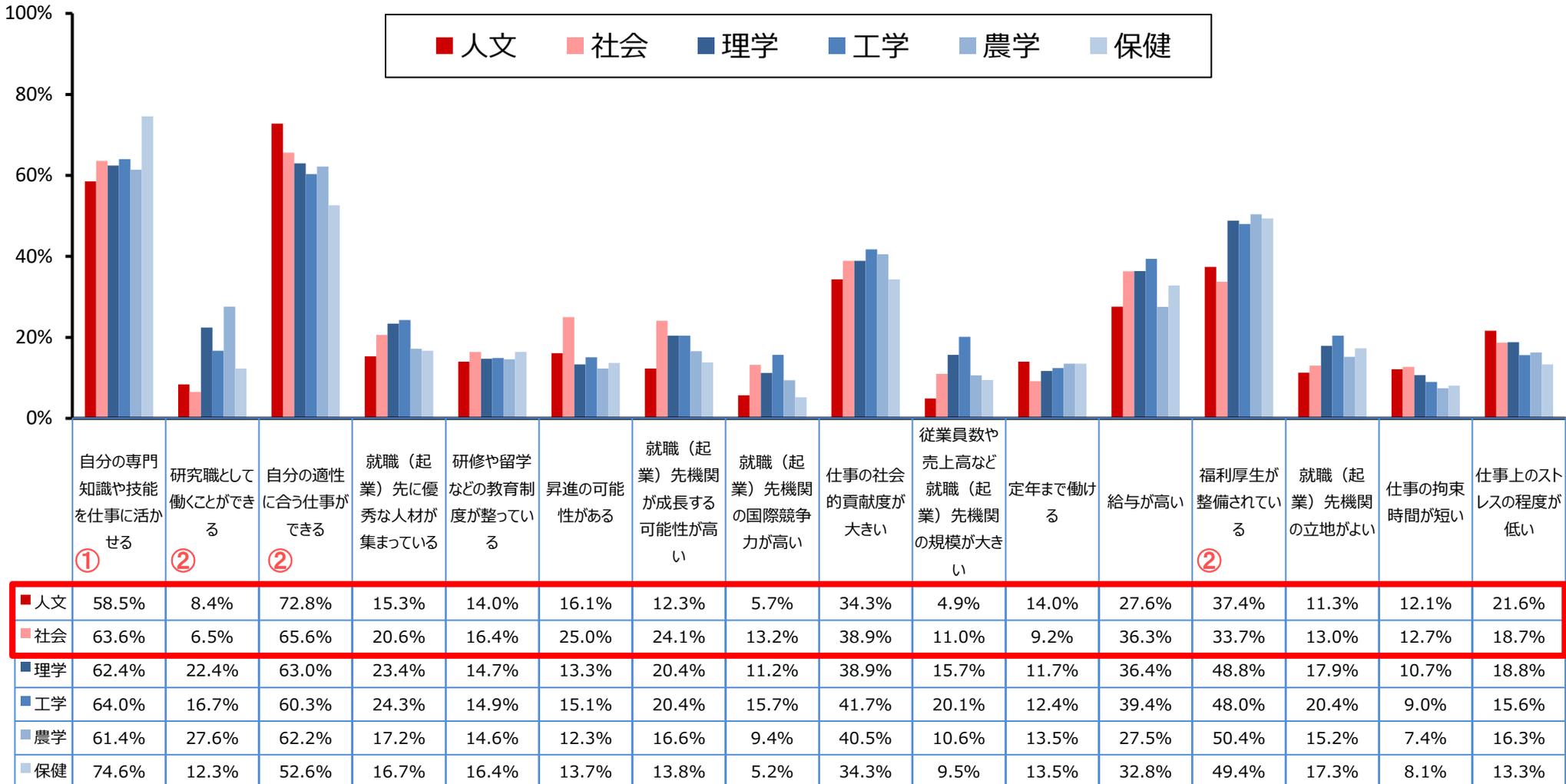
(参考) 就職予定者の博士課程へ進学検討の有無

- 人文科学・社会科学系の修士卒求職者は、他の分野に比べて博士課程への進学を検討した割合が高い。



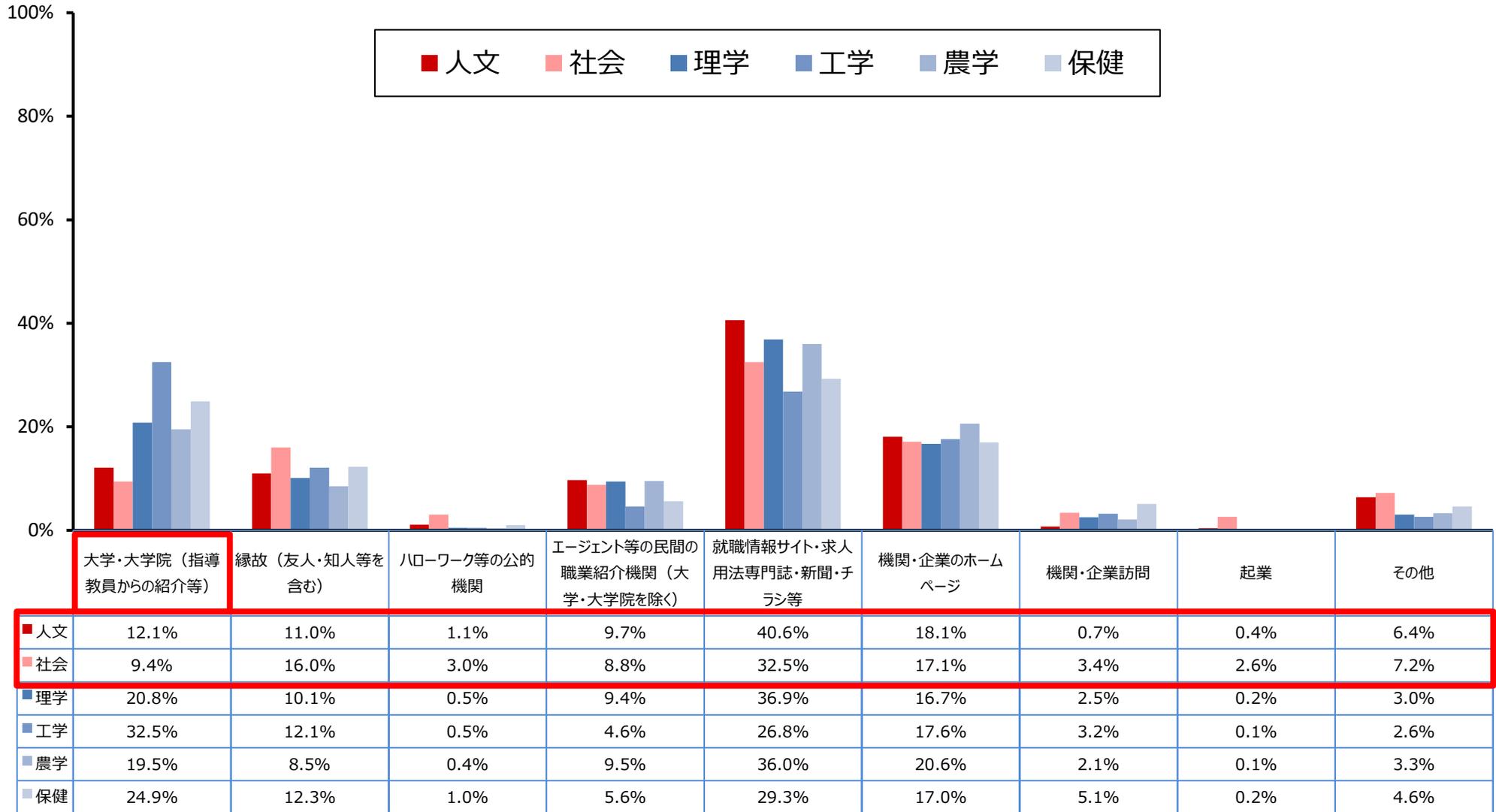
就職先を選択する際に重視した（する）事項

- ① 修士課程修了後に就職先を選択する際、「自分の専門知や技能を仕事に活かせる」ことを重視する者は多いが、その割合は人文科学・社会科学系において特に高いとは言えず、人文科学系はむしろ相対的に低い傾向にある
- ② 人文科学・社会科学系の修士卒求職者は、研究職として働くことや福利厚生充実はそれほど重視しておらず、自分の適性に合った仕事ができることを重視している傾向にある



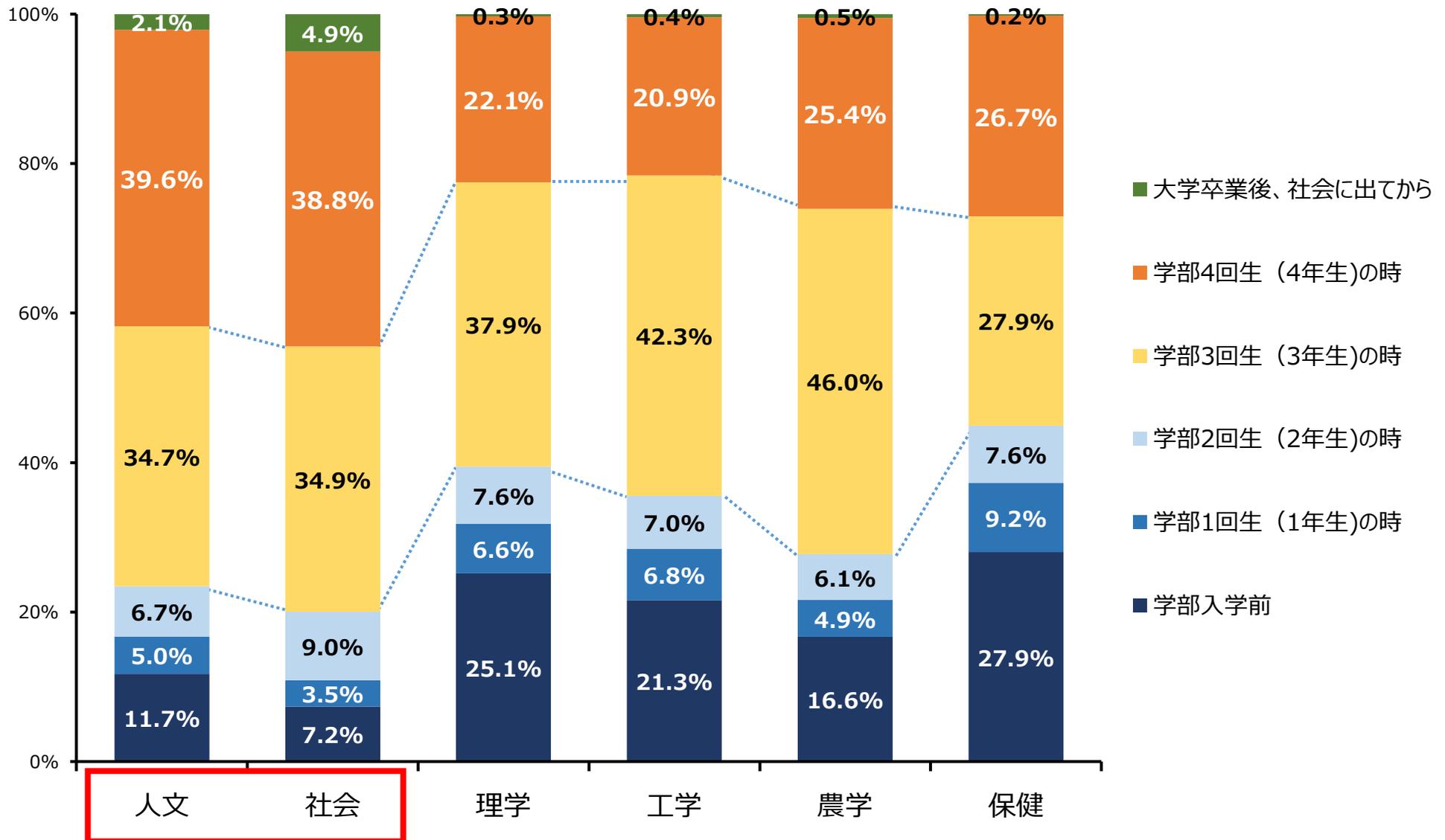
(参考) 雇用先の入職経路

- 人文科学・社会科学系では、理工農系と比較して、大学院や指導教員からの紹介等による就職事例が少ない。



修士課程進学を決めた時期（社会人経験なしの学生）

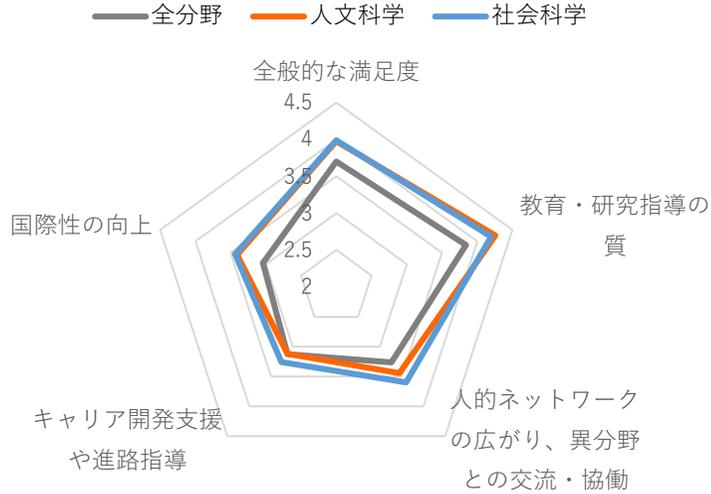
● 人文科学・社会科学系では、他の分野と比較して修士課程への進学を決める時期が遅い。



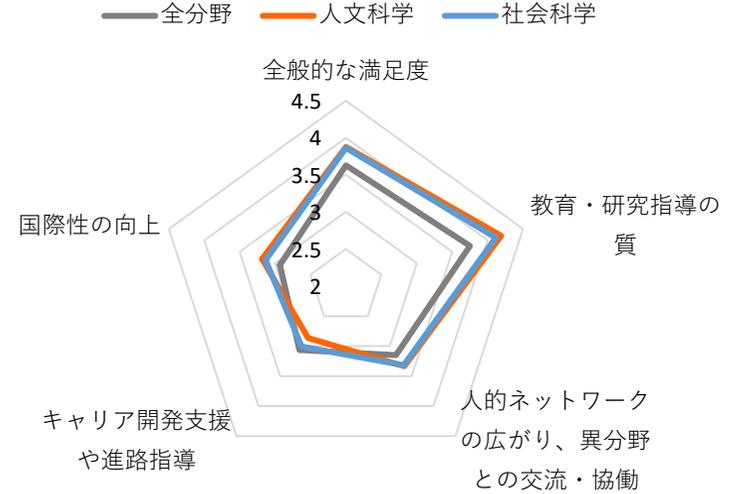
修士課程の満足度

- 人文科学・社会科学系における修士課程在籍中の経験に対する満足度は、「キャリア開発支援」及び社会人学生からの「人的ネットワーク」を除き、他の分野に比して高い傾向にある。

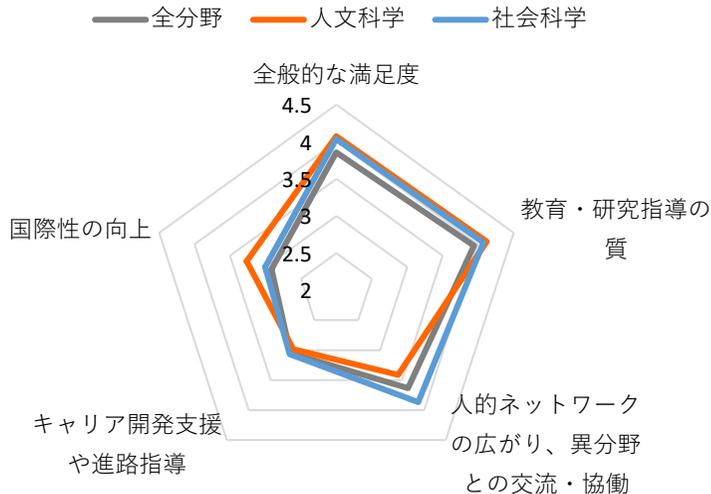
修了者全体



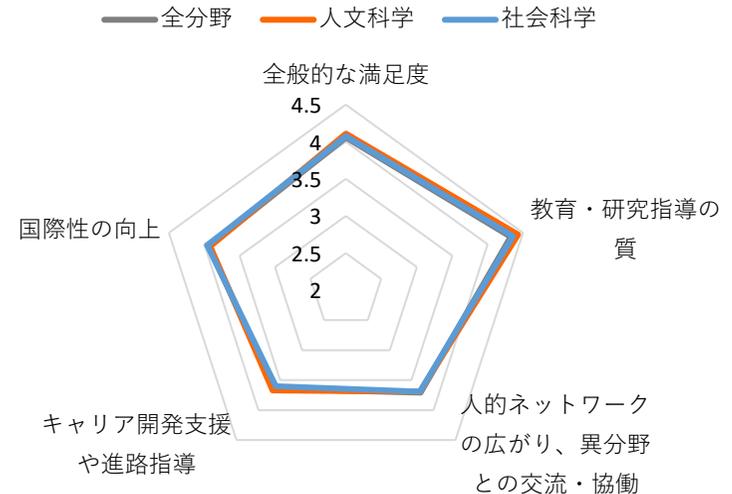
ストレート



社会人

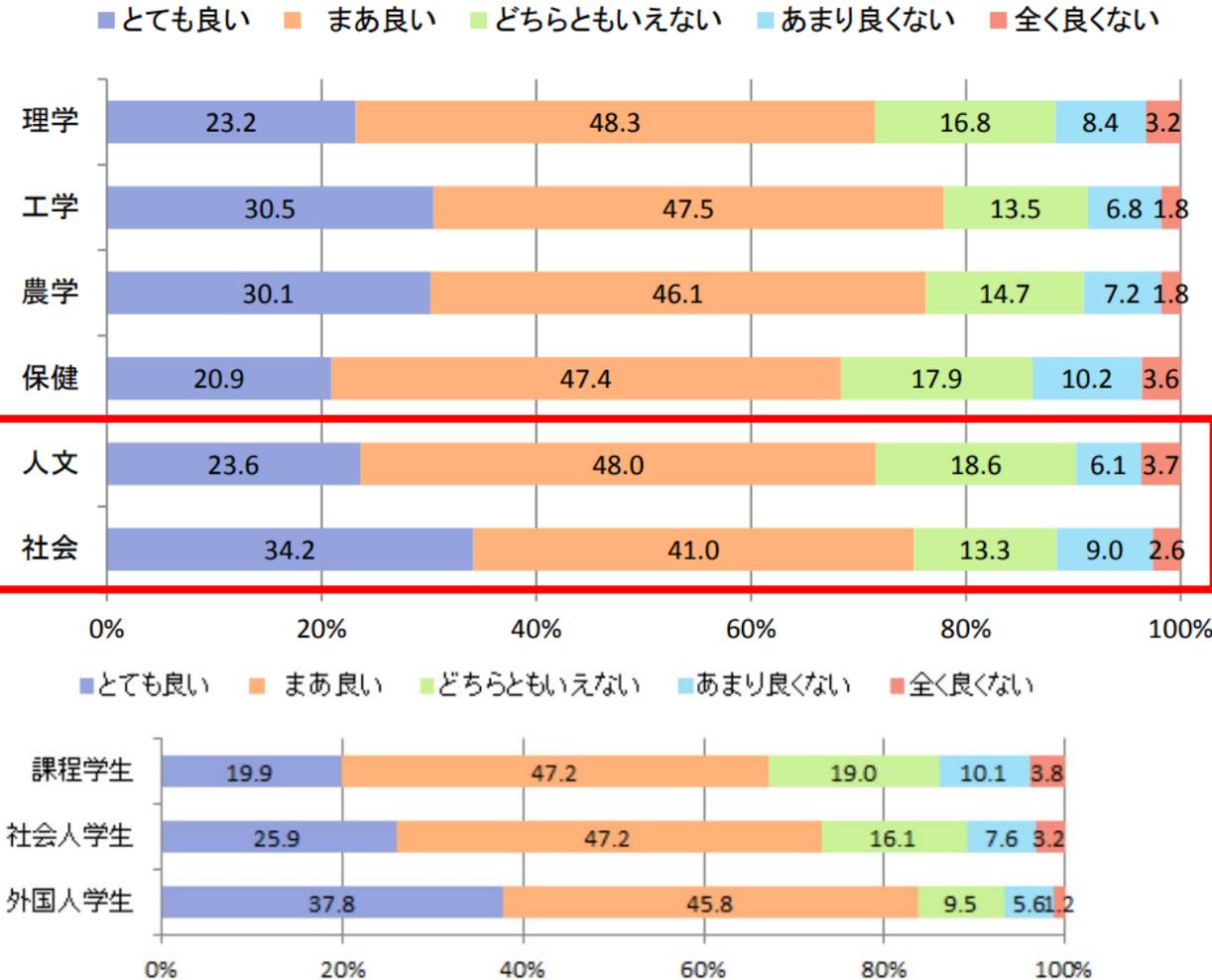


留学生

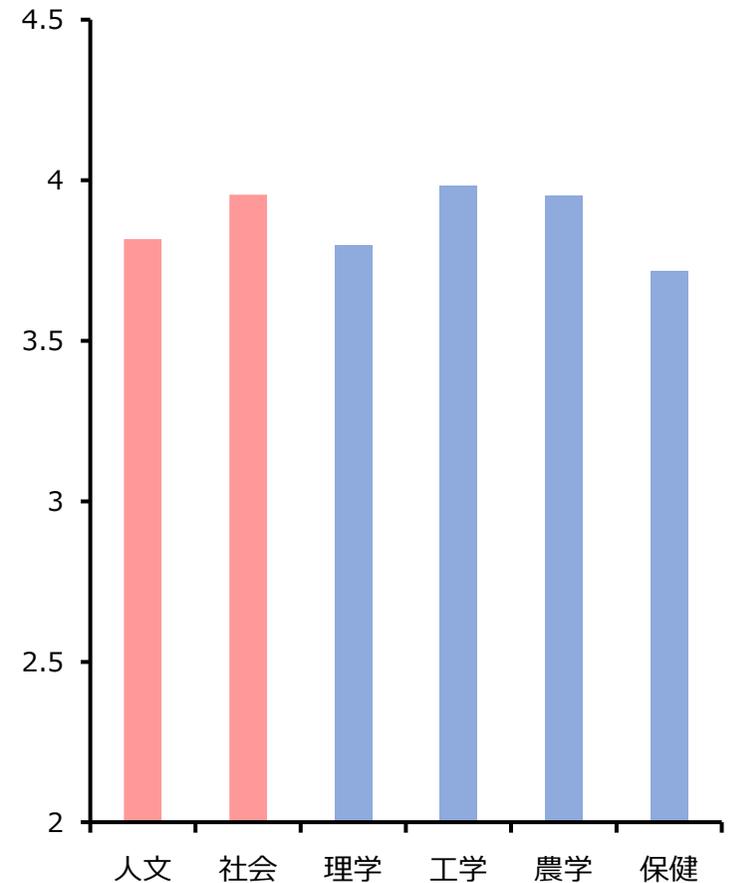


博士課程の満足度

- 博士課程プログラムに対する満足度は、人文科学・社会科学系と他の分野とで大きな差はない。
- なお博士課程プログラムへの満足度は、全分野平均において課程学生(ストレート)が最も低く、社会人学生、外国人学生の順に高くなる傾向。

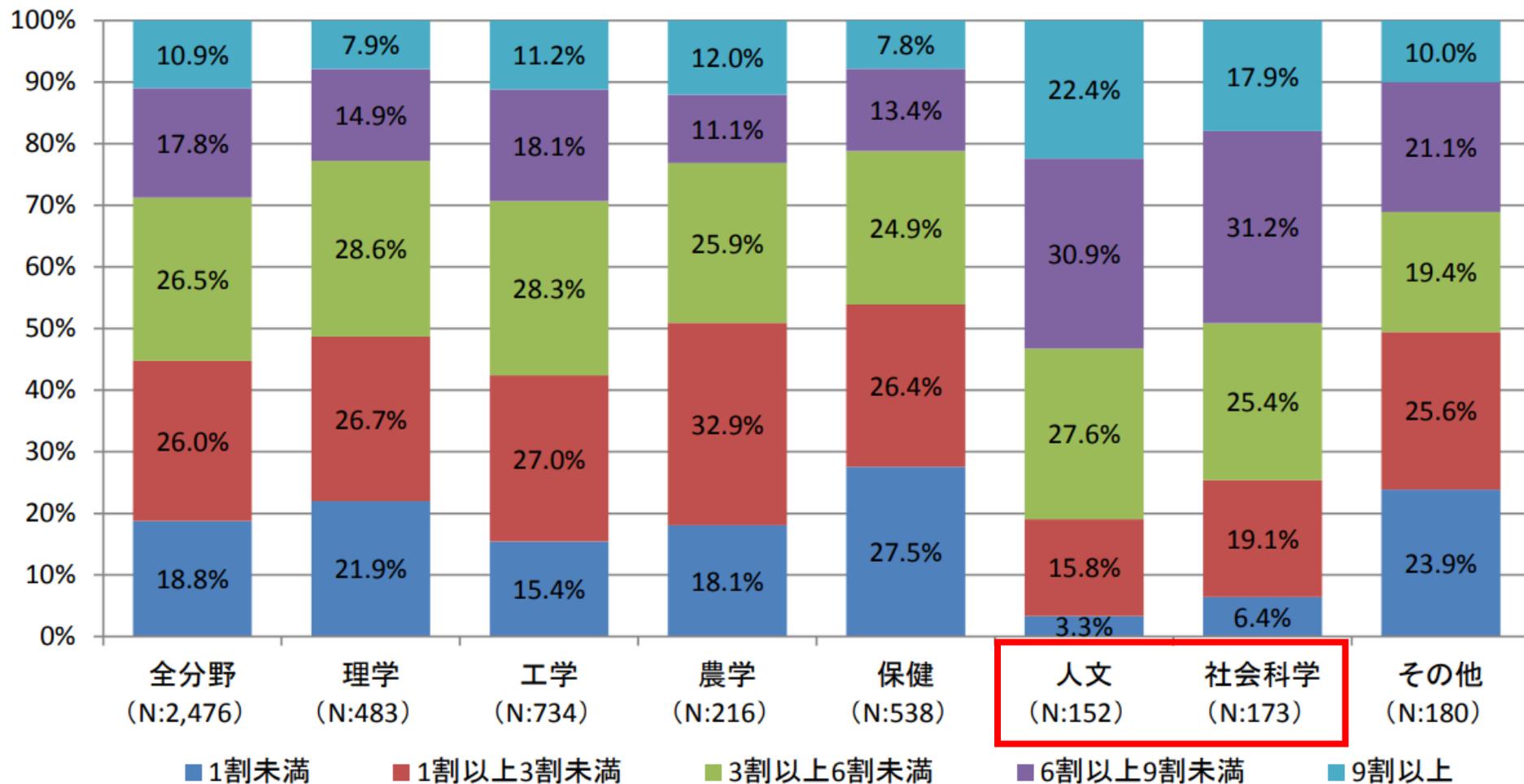


スコア化



(参考) 大学院で履修した授業のうち履修して良かったと思う授業の割合

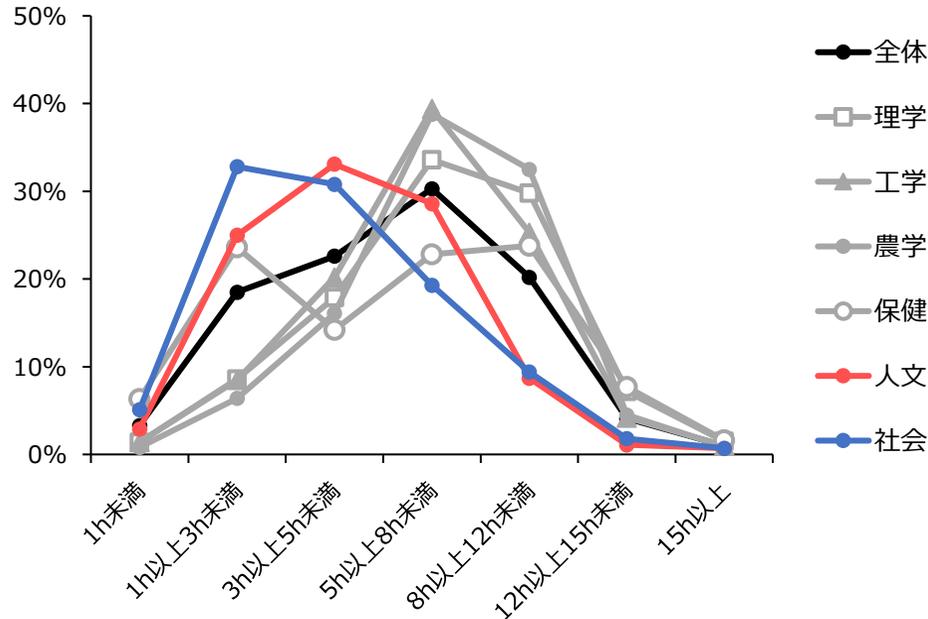
- 大学院(修士・博士)の授業のうち履修して良かったと思う授業が6割以上を占めると回答した学生は3割以下に留まる。
- 人文・社会科学系では他の分野と比べて履修して良かったと思う授業の割合が高い。



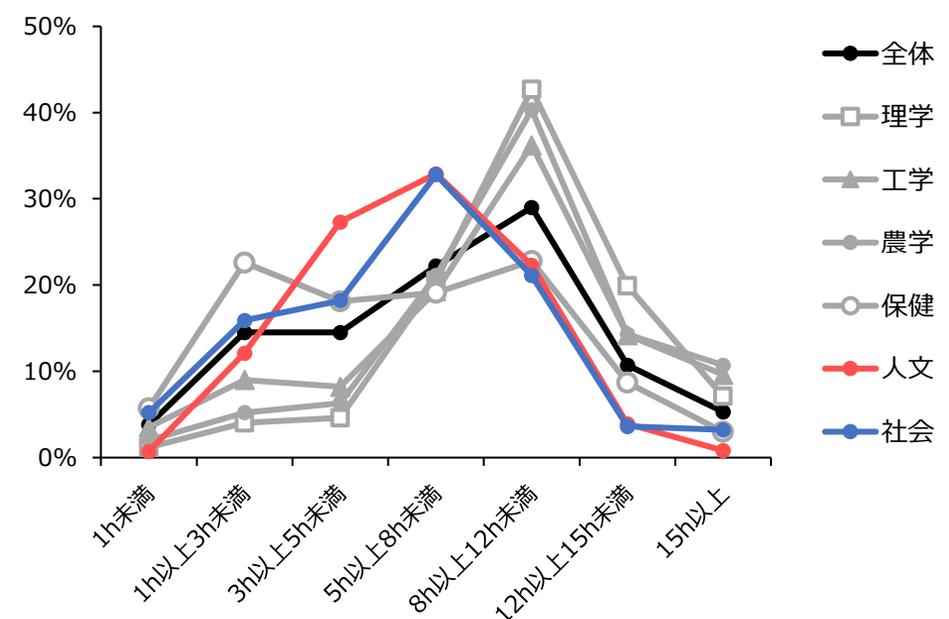
研究教育時間、論文指導について

- 人文科学・社会科学分野の研究における「スローサイエンス性」に関するデータは取得できず(研究テーマによっても大きく異なることが指摘されている)。
- 人文科学・社会科学分野の大学院生の1日あたりの研究時間は、自然科学分野と比べて短い傾向(下図)。
- 指導教員との関係性(密接度)、研究室(ゼミ)の構成や風土も自然科学系とは大きく異なる。

平日 1 日当たりの平均研究時間 (修士課程)



平日 1 日当たりの平均研究時間 (博士課程)



【出典左】 修士課程 (6年制学科を含む) 在籍者を起点とした追跡調査(2020年度修了(卒業)者及び修了(卒業)予定者に関する報告) NISTEP RESEARCH MATERIAL, No.310、文部科学省 科学技術・学術政策研究所。
 【出典右】 川村 真理 土屋 隆裕 星野 利彦「博士人材追跡調査」第 4 次報告書 NISTEP Research Material No.317 文部科学省 科学技術・学術政策研究所。

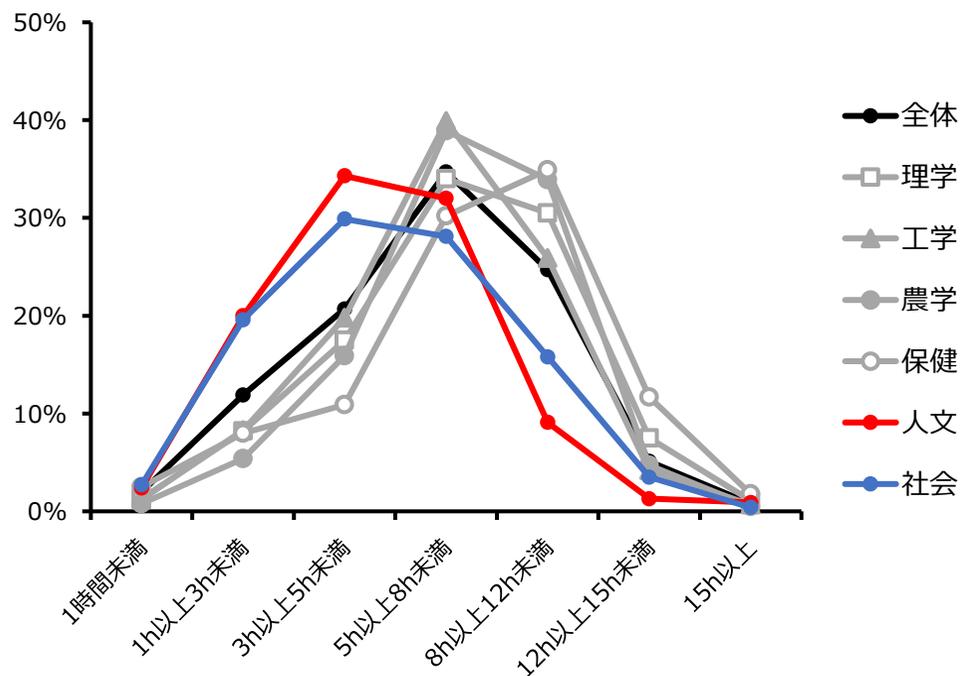
学位取得までに要する期間の長さや修了後のキャリアパスは、研究分野や研究テーマの特性のみならず、研究時間や教員の研究指導のあり方、組織的な支援のあり方等にも大きく左右されると考えられる。

⇒ 関係するデータを整理した上で、今後、研究教育の課題や適切なあり方を検討する必要。

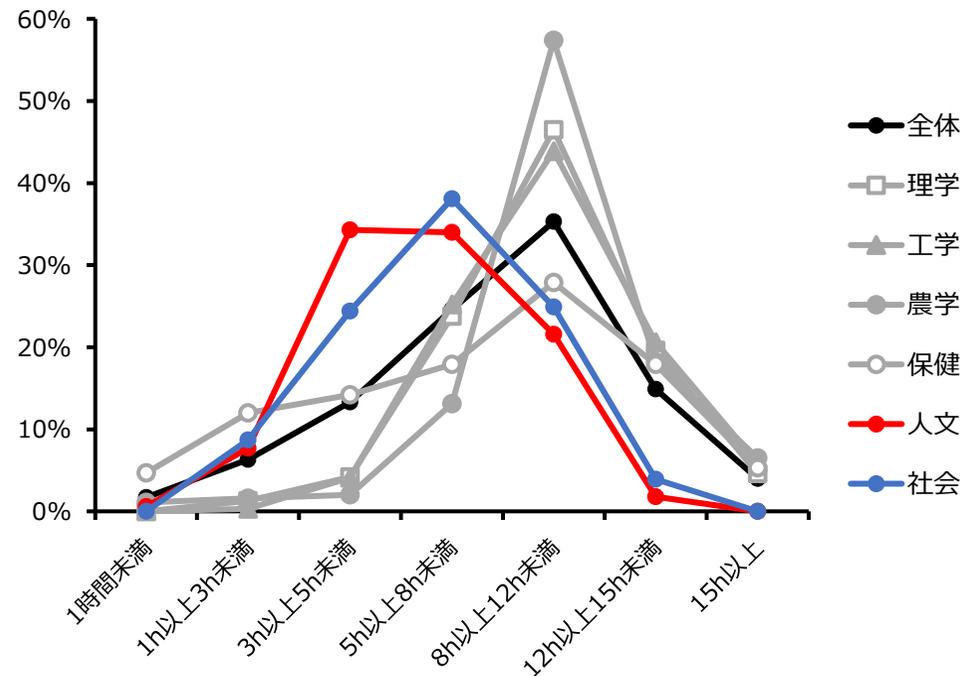
人文科学・社会科学系の研究教育特性

- 社会人学生及び留学生を除いて比較した場合も、人文科学・社会科学分野の大学院生の1日あたりの研究時間は、自然科学分野と比べて短い傾向。

平日1日当たりの平均研究時間
(修士課程・社会人学生及び留学生を除く)



平日1日当たりの平均研究時間
(博士課程・社会人学生及び留学生を除く)

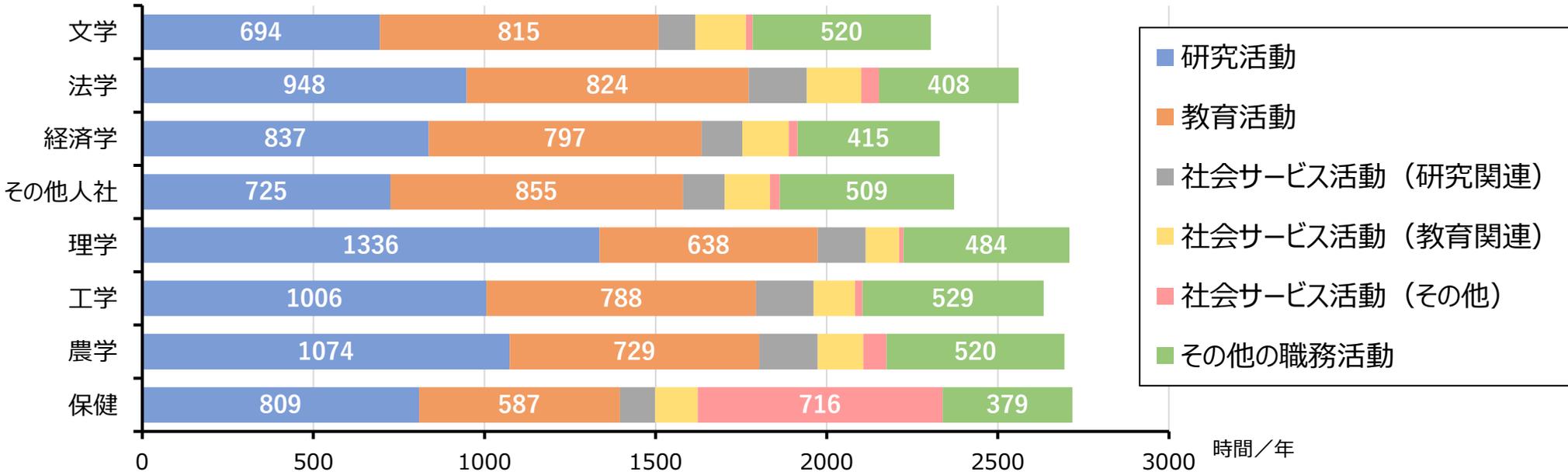


【出典左】修士課程（6年制学科を含む）在籍者を起点とした追跡調査(2020年度修了（卒業）者及び修了（卒業）予定者に関する報告) NISTEP RESEARCH MATERIAL, No.310、文部科学省 科学技術・学術政策研究所。
【出典右】川村 真理 土屋 隆裕 星野 利彦「博士人材追跡調査」第4次報告書 NISTEP Research Material No.317 文部科学省 科学技術・学術政策研究所。

(参考) 人文科学・社会科学系の研究教育特性

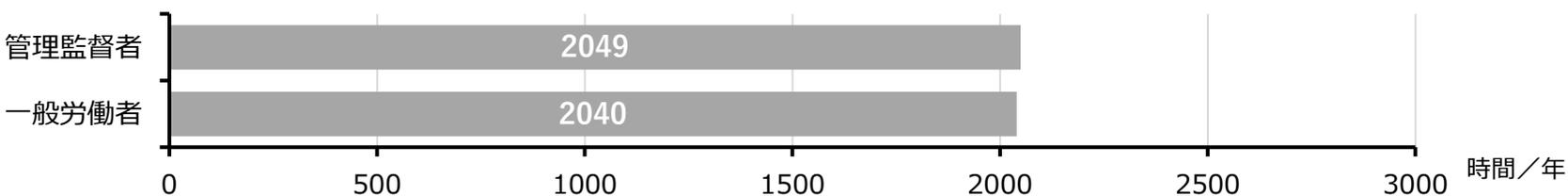
- 人文科学・社会科学系の教員は自然科学系の教員よりも総職務時間に占める研究活動が少なく、教育活動が多い(研究活動と教育活動の合計時間は、保健系を除き理工農系のほうが長い)。
- 人文科学・社会科学系の中では法学系の研究活動時間と総職務時間が長い。

教員の総職務時間の活動時間の組織の学問分野別内訳 (平成29年度)



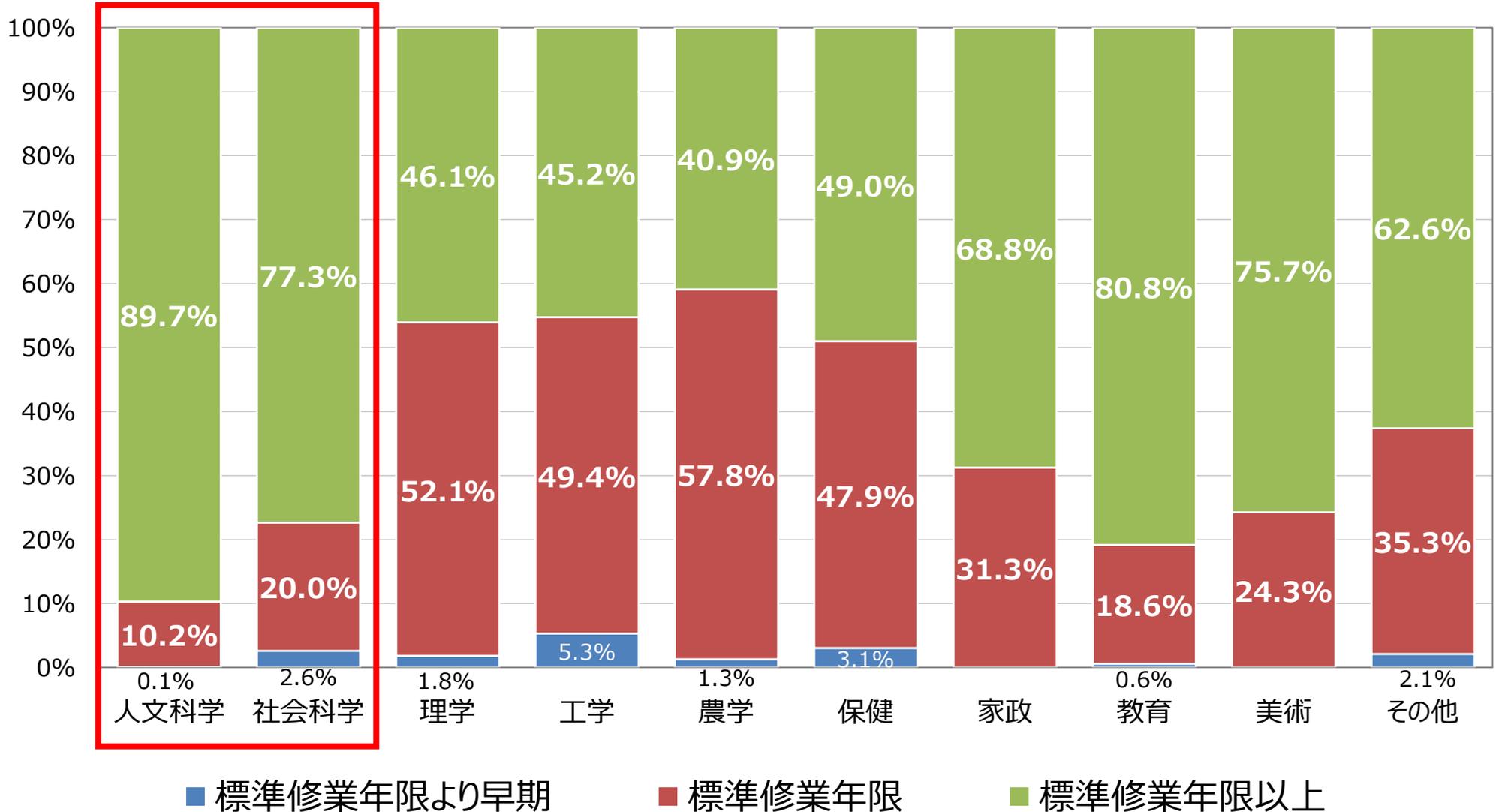
※ 1年間における活動パターン別の日数と活動パターン別の標準的な1日における職務時間を乗じることで、年間の職務従事時間を集計
 【出典】文部科学省「大学等におけるフルタイム換算データに関する調査報告書」(平成31年3月, 株式会社日経リサーチ)

(参考) 民間企業の年間労働時間平均 (2017年)



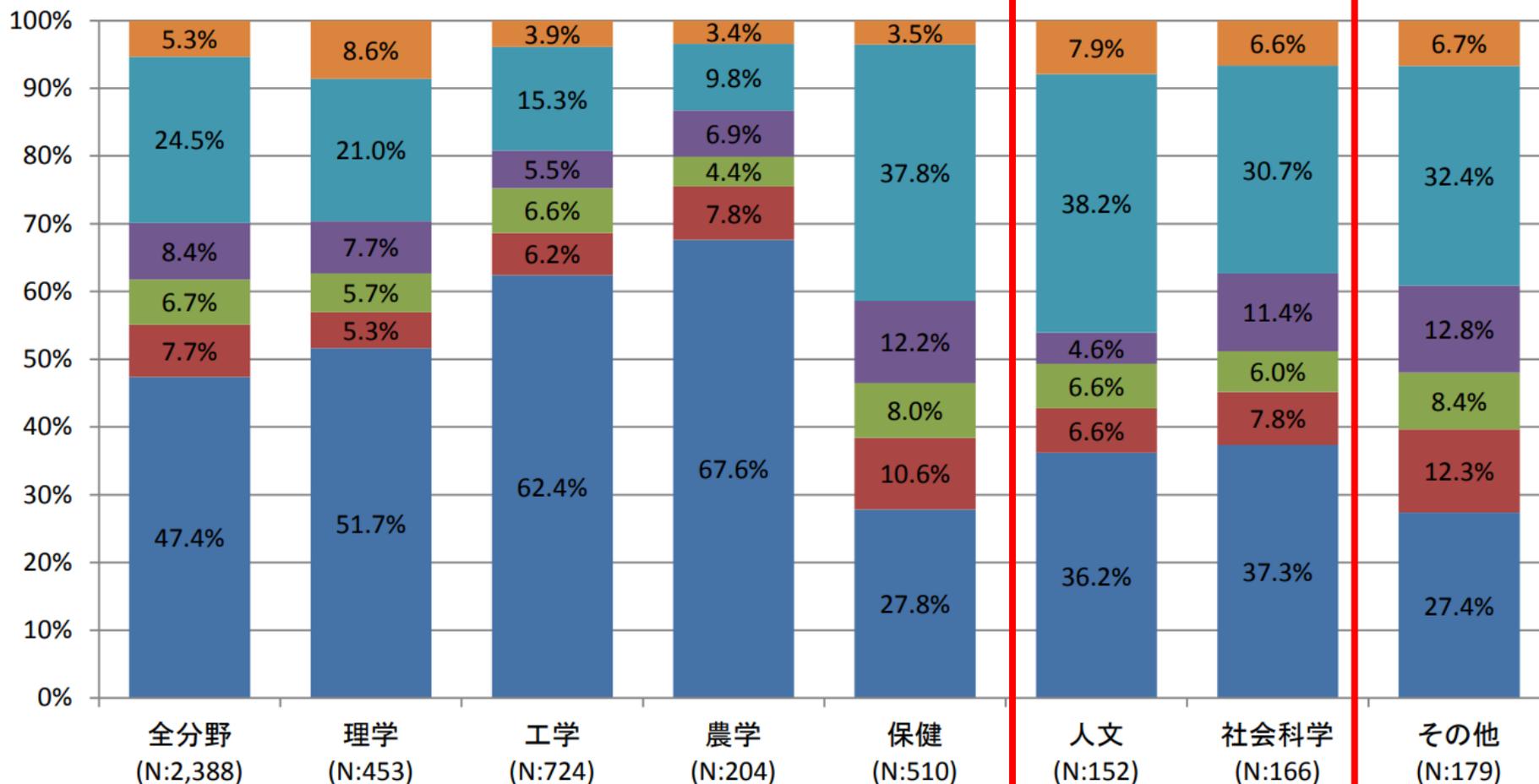
博士課程の標準修業年限超過割合（令和2年度実績）

- 令和4年度に公表された最新の調査においても、人文科学・社会科学系の博士修了者の標準修業年限超過割合は極めて高く、人文科学系においては約9割が標準修業年限を超過している。



博士論文のテーマについて指導教員と合意した時期

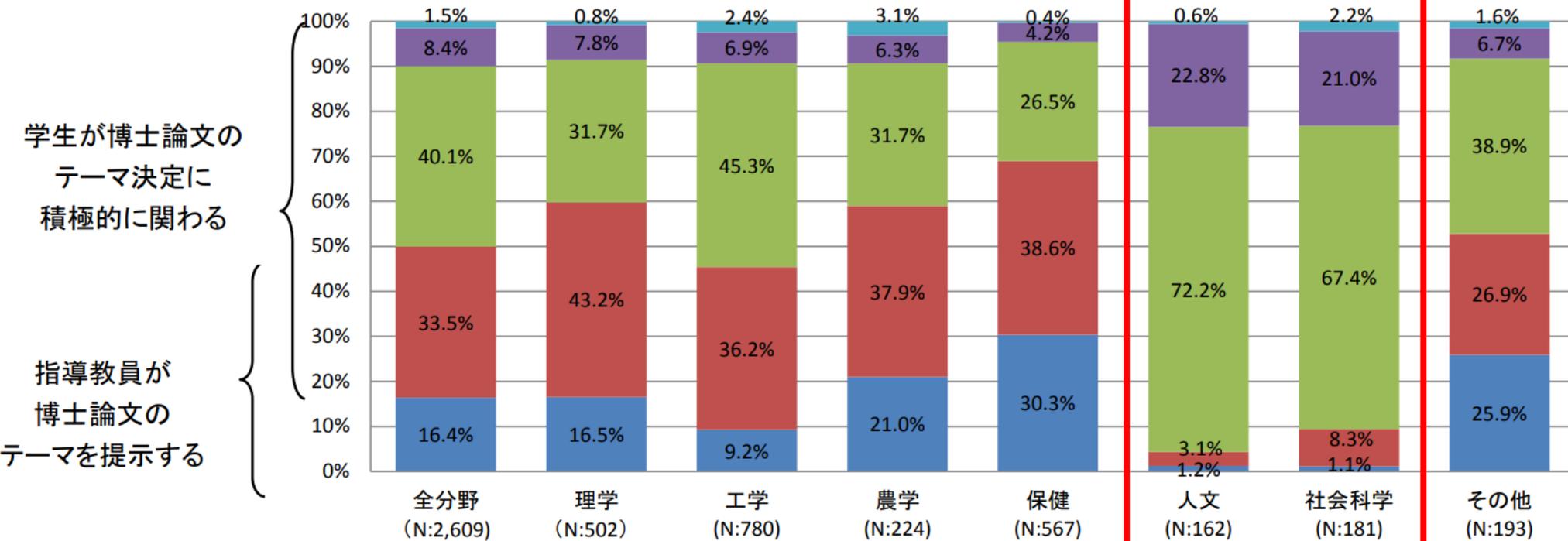
- 人文・社会科学系では博士論文のテーマが決定する時期が他の分野に比較して遅く、人文系では約4割が進学後1年以降となっている。



- 博士課程へ進学・入学以前
- 博士課程進学1ヶ月以降3ヶ月以内
- 博士課程進学3ヶ月以降半年以内
- 博士課程進学半年以降1年以内
- 1年以降
- 特に合意はしていない

研究テーマの設定と自主性について

- 人文・社会科学系では学生が主体的に博士論文のテーマ決定に関わるケースが多い

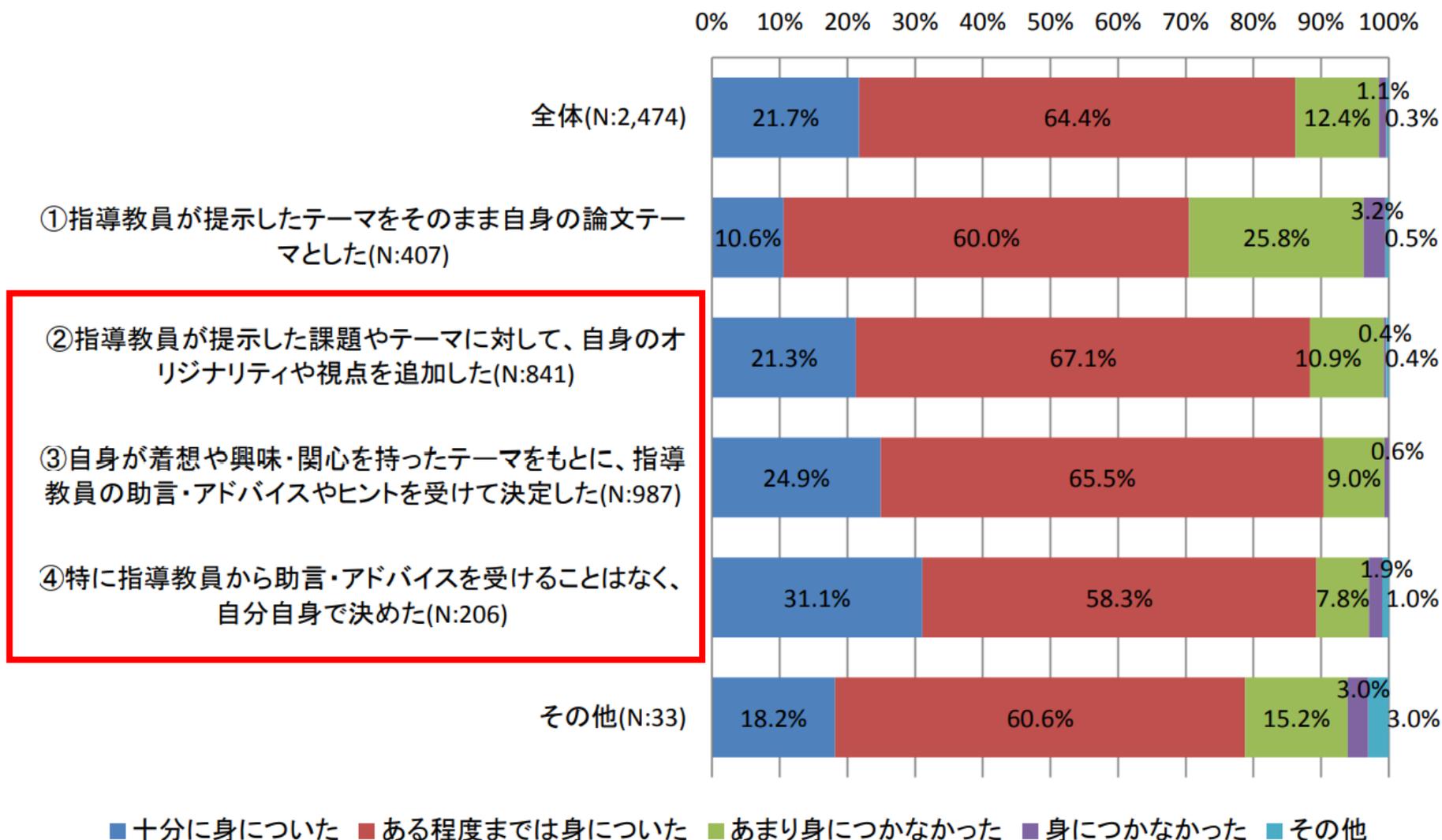


■ その他

- 特に指導教員から助言・アドバイスを受けることはなく、自分自身で決めた
- 自身が着想や興味・関心を持ったテーマをもとに、指導教員の助言・アドバイスやヒントを受けて決定した
- 指導教員が提示した課題やテーマに対して、自身のオリジナリティや視点を追加した
- 指導教員が提示したテーマをそのまま自身の論文テーマとした

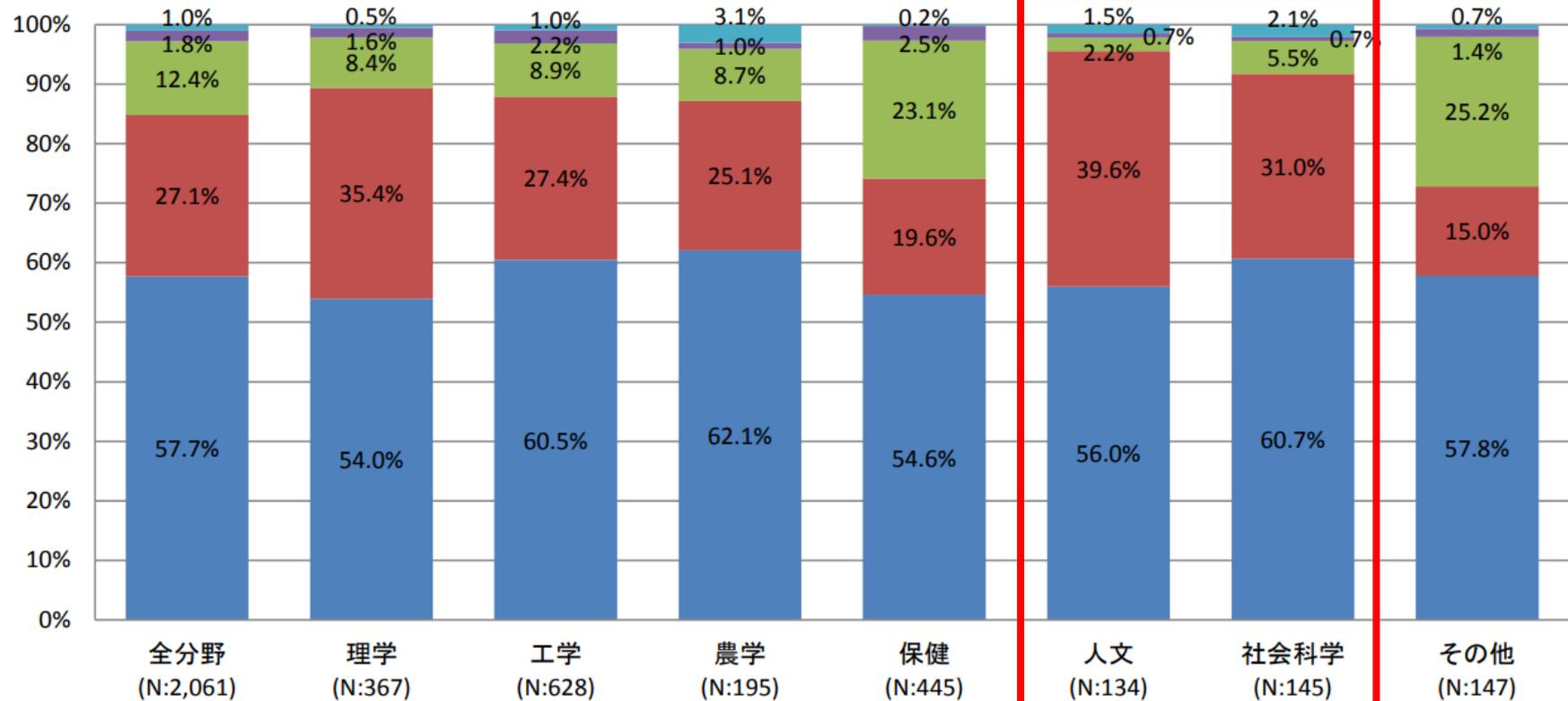
(参考) 博士論文のテーマ決定と「専門分野の議論を批判的に理解し自身の仮説を明確に表現する能力」を身につけたと考える割合

- 博士論文のテーマ決定に積極的に関わった学生は、研究能力を身につけたと自己評価する割合が高い



博士論文作成のプロセス管理への指導教員の関わり方

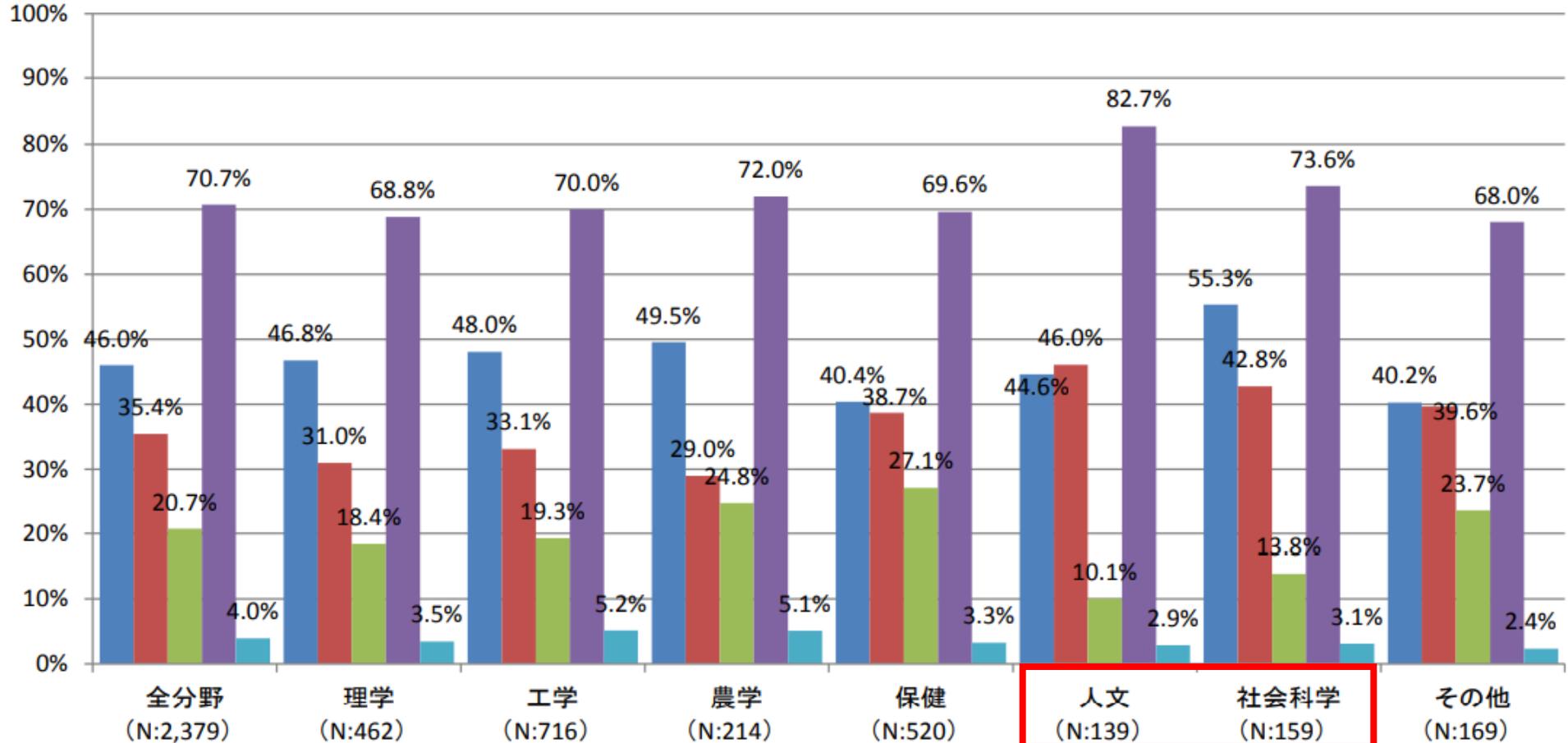
- 博士論文作成のプロセス管理は、分野間でほとんど変わらないものの、人文科学・社会科学系では「指導教員が計画を作成し、指導教員と自分が共にプロセスを管理した」とする割合が少ない。



- その他
- 指導教員が計画を作成し、自身でのみプロセスを管理した
- 指導教員が計画を作成し、指導教員と自分が共にプロセスを管理した
- 自身で計画を作成し、自身でのみプロセスを管理した
- 自身で計画を作成し、指導教員と自分が共にプロセスを管理した

博士論文作成の指導形式

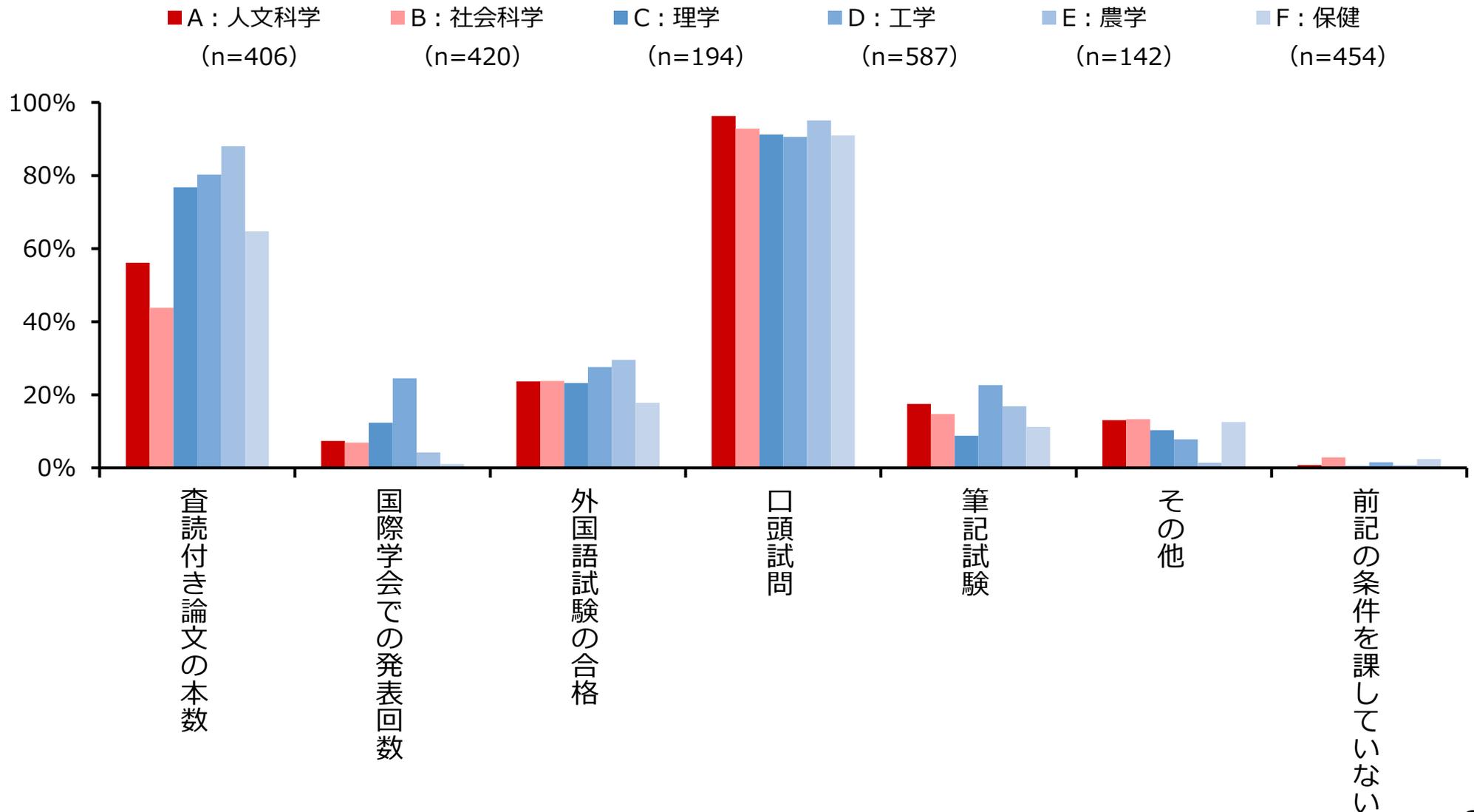
- 人文系では個別指導が他分野よりも多く、社会科学系では複数研究室などにより複数の教員や学生が集まりミーティング・ゼミ・報告会が開催される割合が他分野よりも多い。



- 複数研究室などにより複数の教員や学生が集まるミーティング・ゼミ・報告会等が開催され、研究進捗報告や研究指導が行われる
- 専攻・研究科等の組織として開催する学内の発表の場が開催され、研究進捗報告や研究指導が行われる
- 自身の調整により複数の教員が同時に集まる機会が設けられ、研究進捗報告や研究指導が行われる
- 自身の調整により(単数もしくは複数の)指導教員と個別に打ち合わせをする機会が設けられ、研究進捗報告や研究指導が行われる
- その他

課程博士授与にあたっての条件

- 人文科学・社会科学系では査読付き論文の本数について、課程博士の授与条件としている割合が少ない。

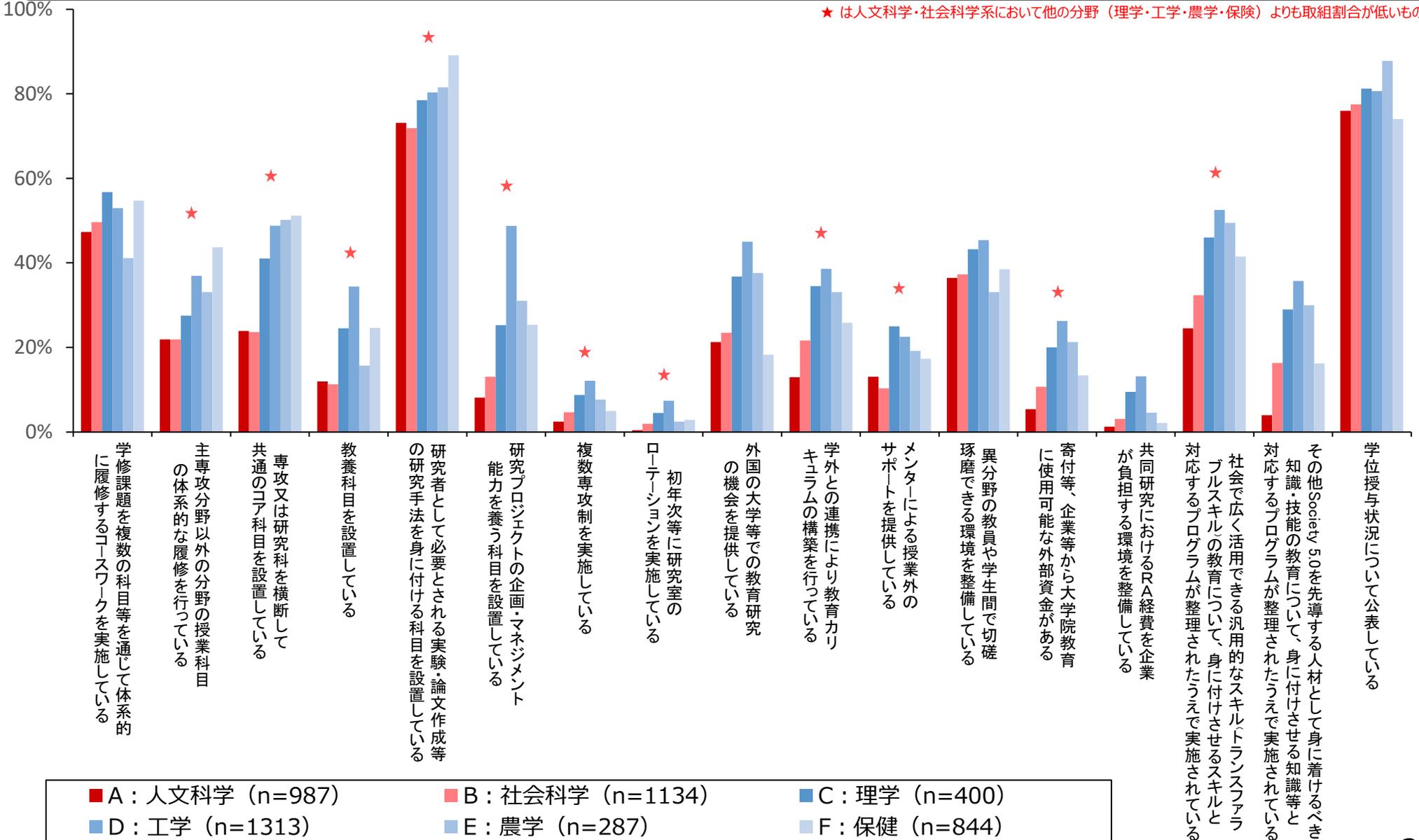


組織的な大学院教育の改革状況について

大学院教育改革状況（体系的な大学院教育）

● 答申等で示されてきた大学院教育の改革方針について、人文科学・社会科学系では全般的に取組が進んでいない

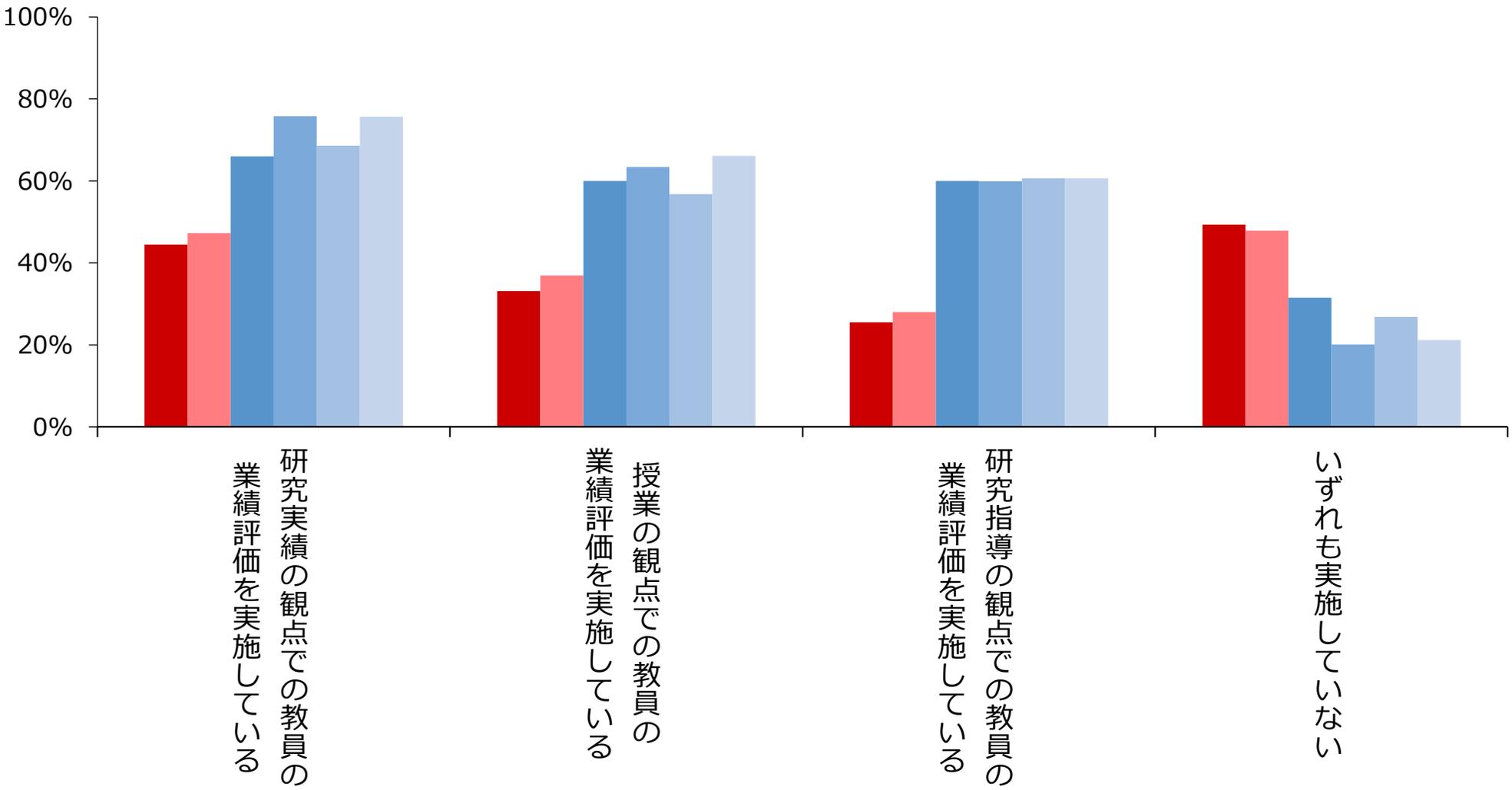
★ は人文科学・社会科学系において他の分野（理学・工学・農学・保健）よりも取組割合が低いもの



【出典】令和3年度文部科学省委託調査「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（リベルタス・コンサルティング、令和4年）

大学院教育改革状況（教員の業績評価）

● 人文科学・社会科学系では理工系分野と比較して、教員の教育研究活動に対する業績評価が行われていない

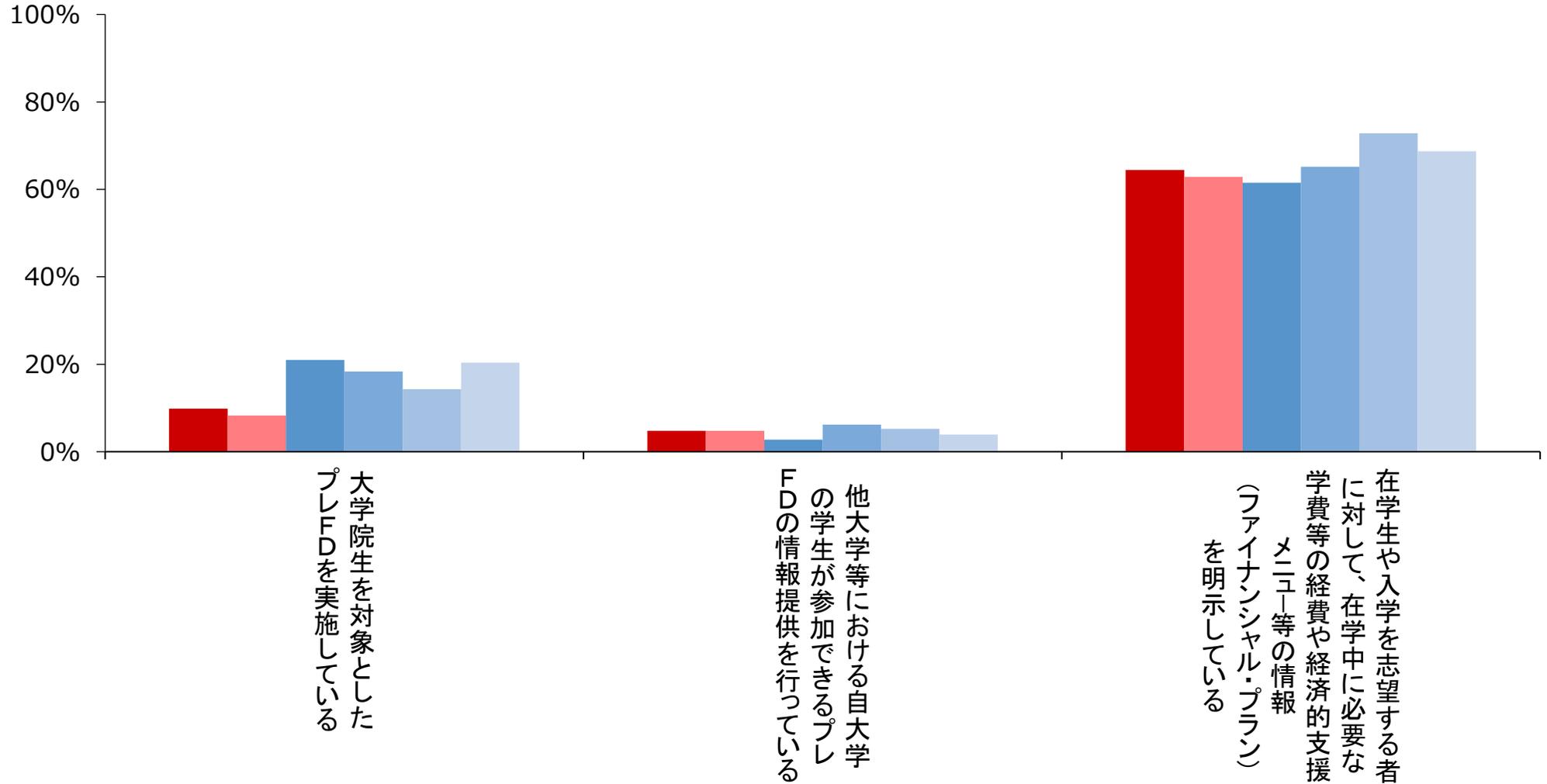


■ A : 人文科学 (n=987)
 ■ B : 社会科学 (n=1134)
 ■ C : 理学 (n=400)
■ D : 工学 (n=1313)
 ■ E : 農学 (n=287)
 ■ F : 保健 (n=844)

【出典】令和3年度文部科学省委託調査「大学院における教育改革の実態把握・分析等に関する調査研究」（リベルタス・コンサルティング、令和4年）

大学院教育改革状況（大学教員を志す者への教育能力養成システムの構築等）

● プレFDの導入率はすべての分野において低いが、人文科学・社会科学系においては特に低調



■ A: 人文科学 (n=987)

■ B: 社会科学 (n=1134)

■ C: 理学 (n=400)

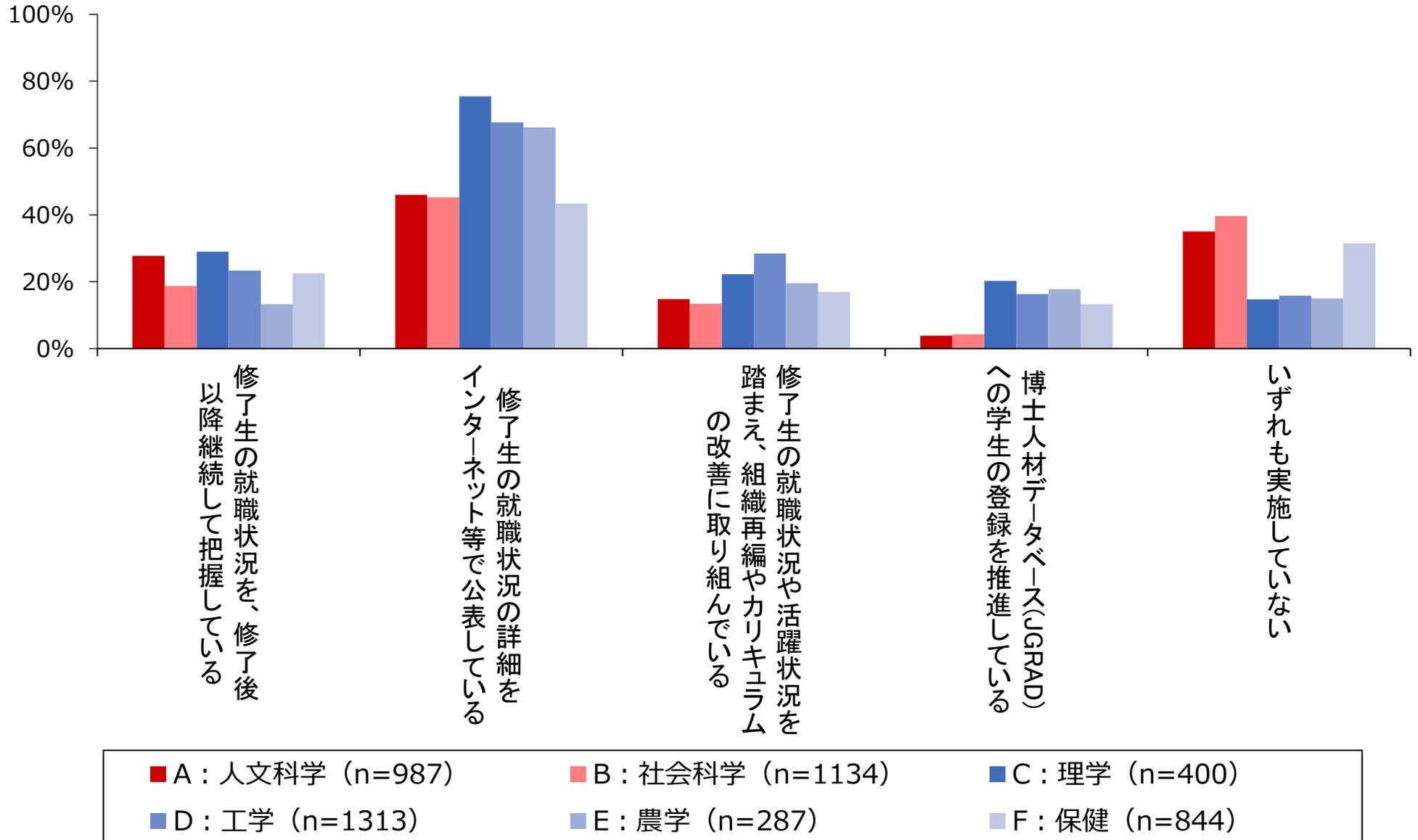
■ D: 工学 (n=1313)

■ E: 農学 (n=287)

■ F: 保健 (n=844)

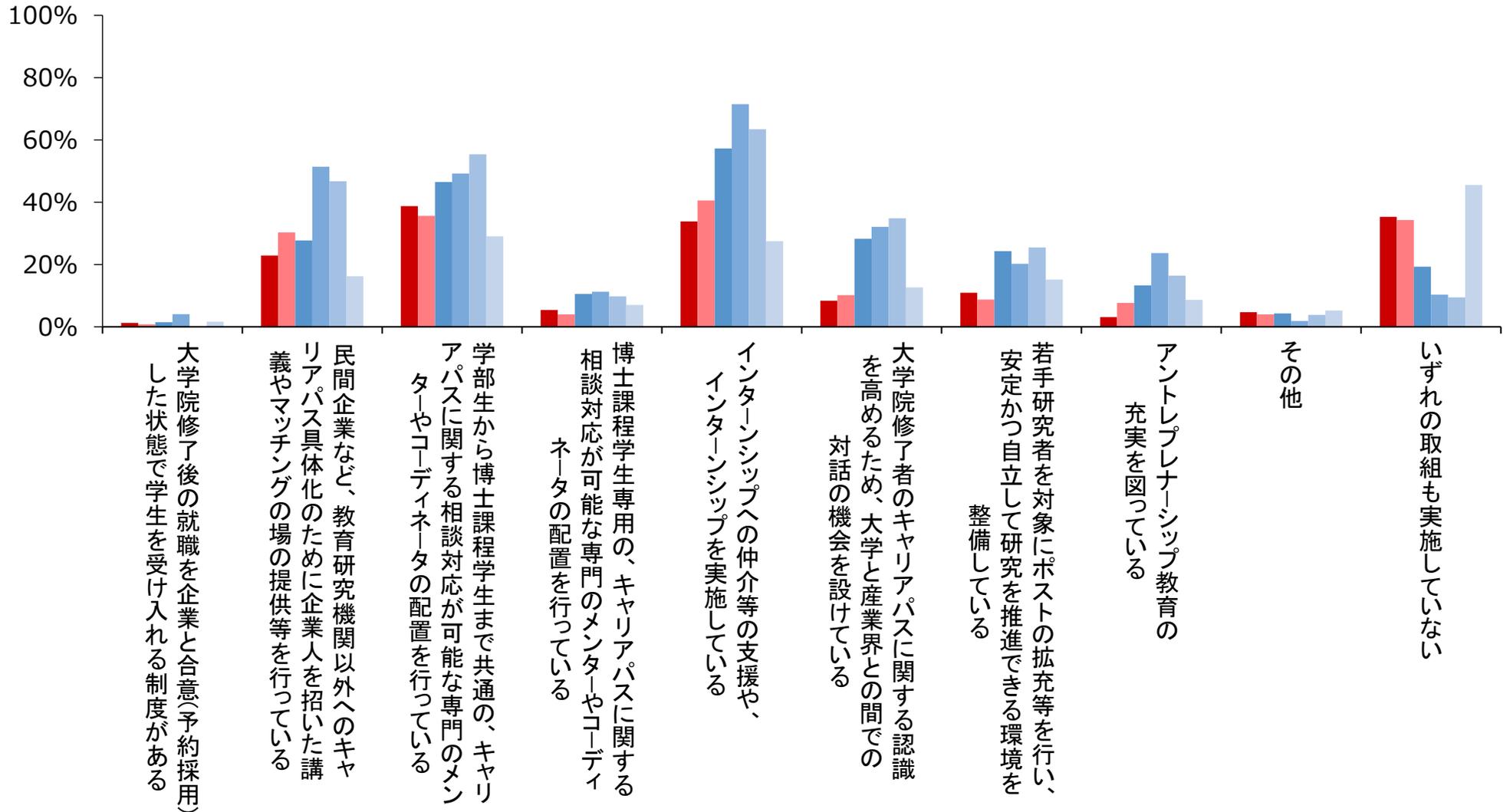
大学院教育改革状況（キャリアパスの確保と可視化）

● 人文科学・社会科学系では修了生のキャリアパスの可視化が低調



大学院教育改革状況（組織的な就職支援）

● 人文科学・社会科学系では民間企業とのマッチングや対話の機会の確保、若手の安定的な環境の整備等が低調



■ A : 人文科学 (n=987)

■ B : 社会科学 (n=1134)

■ C : 理学 (n=400)

■ D : 工学 (n=1313)

■ E : 農学 (n=287)

■ F : 保健 (n=844)

人文科学・社会科学系の大学院教育について（現状まとめ）

■ 大学院進学者の意識について

- 人文科学・社会科学系における博士進学者はアカデミア志向が強い。特に人文科学系においては修士課程進学タイミングからアカデミア志向が強く、特定の課題やテーマへの関心が高い。
- 人文科学・社会科学系の修士課程修了後に民間企業等への就職を希望する者は、研究職として働くことや福利厚生の実質はさほど重視しておらず、自分の適性に合った仕事ができることを重視する傾向にある。
- 人文科学・社会科学系の修士課程プログラムについて、修了者の満足度は（キャリア開発を除き）他の分野に比して高い傾向にあり、博士課程プログラムについての満足度は、分野によって明確な差は見られない。

■ 研究教育時間、論文指導について

- 人文科学・社会科学系では標準修業年限の超過割合が高く、人文科学系においては標準修業年限を超過するに見合った安定したアカデミックポストやキャリアパスが必ずしも準備されている状況にはない（前回までの議論）。
- 人文科学・社会科学系の大学院生の研究時間は、自然科学系と比較して1日あたり平均で3時間程度短い可能性が示唆されている。
- 人文科学・社会科学系の博士論文に係るテーマ設定には学生が主体的に関わっている。これが身に着けた能力の満足度を高める一方で、テーマ決定までに1年以上を要することや、標準修業年限の過度な超過に繋がっている可能性があるのではないか。

■ 組織的な大学院教育の改革状況について

- 政府から示されてきた大学院教育改革の方向性について、人文科学・社会科学系においては特に、体系的な教育や教員評価、キャリアパスの開拓に繋がる組織的な取組が低調。
- これについて、人文科学・社会科学系の現場や教員の意識の問題か、補助金等による影響力を発揮できていないことによる問題か、これまでの答申と人文科学・社会科学系の分野特性が噛み合っていないためか、あるいは他の原因か。

これまでの議論において、人文科学・社会科学系と自然科学系の大学院教育やそのキャリアパスに関する相違点、加えて人文科学系と社会科学系の相違点が明らかとなってきている。

これを踏まえ、人文科学・社会科学系の大学院教育の現状やその改革に必要な観点、方向性等についてご議論いただきたい。